

レクリエーション研究

第4号

- ☆ 都市化過程にある地方都市のフィジカル・レクリエーションに関する事例研究
- ☆ 学校・レクリエーションの研究
——福岡県下の高等学校体育祭・運動会の現状と問題点について——
- ☆ レク・リーダー研修会における教育効果に関する一考察
——とくにその態度の変化について——
- ☆ 生活時間からみた主婦の余暇行動の分析
——性格、体格による相違について——
- ☆ 日本レクリエーション学会会員研究目録

日本レクリエーション学会

昭和49年5月

レクリエーション研究

— 目 次 —

江 橋 慎四郎	… 都市化過程にある地方都市の	
永 吉 宏 英	フィジカル・レクリエーションに関する事例研究	… 3
秋 吉 嘉 範	… 学校レクリエーションの研究	
	— 福岡県下の高等学校体育祭、運動会の現状と問題	
	点について —	…………… 12
高 橋 和 敏	… レク・リーダー研修会における教育効果に関する一考	
大 北 文 生	察	
野間口 英 敏	— とくにその態度の変化について —	…………… 21
川 向 妙 子		
鈴 木 秀 雄		
池 田 勝	… 生活時間からみた主婦の余暇行動の分析	
江 藤 明 美	— 性格、体格による相違について —	…………… 31
欧文レジメ		…………… 41
資 料	… 日本レクリエーション学会会員研究目録	…………… 48
研究機関紹介(その2)		…………… 52



都市化過程にある地方都市の

フィジカル・レクリエーションに関する事例研究

東京大学 永吉 宏 英

東京大学 江橋 慎四郎

I 研究の目的

本研究の目的は、都市化過程にある地方都市の住民の余暇活動、特にスポーツ活動が都市化の進行に伴って都市内部に共存している農村地区、市街地区という地域的性格をどのように反映しつつ変化しているかを、特に農村地区に注目して市街地区と対比しながら明らかにすることである。そのため、農村地区の人々の余暇活動について図1のような説明図式を作成し、今回の調査の対象である小山市を市街地区と農村地区にわけて分析を加えた。

都市化の進行に伴ない、農家においても所得

は増大し、耐久消費財の普及、1人当り家計費の増大等生活水準における都市一農村の平準化がなされ、余暇活動、なかでもスポーツ活動参加の基盤が整えられつつあるかに見える¹⁾。

しかしながら、それとともに、都市化の進行による耕地面積の停滞または減少、核家族化の進行、結果としての兼業化とそれによる農業外所得の増大、農業労働における労働強化、労働力の高齢化、女性化等の問題があらわれていることにも注目する必要がある。それゆえ、そのような背景を持って獲得された生活水準の都市化、平準化は「生活のゆとり」に容易に結びつ

1) 勝村茂他「地域社会」昭48年、P110

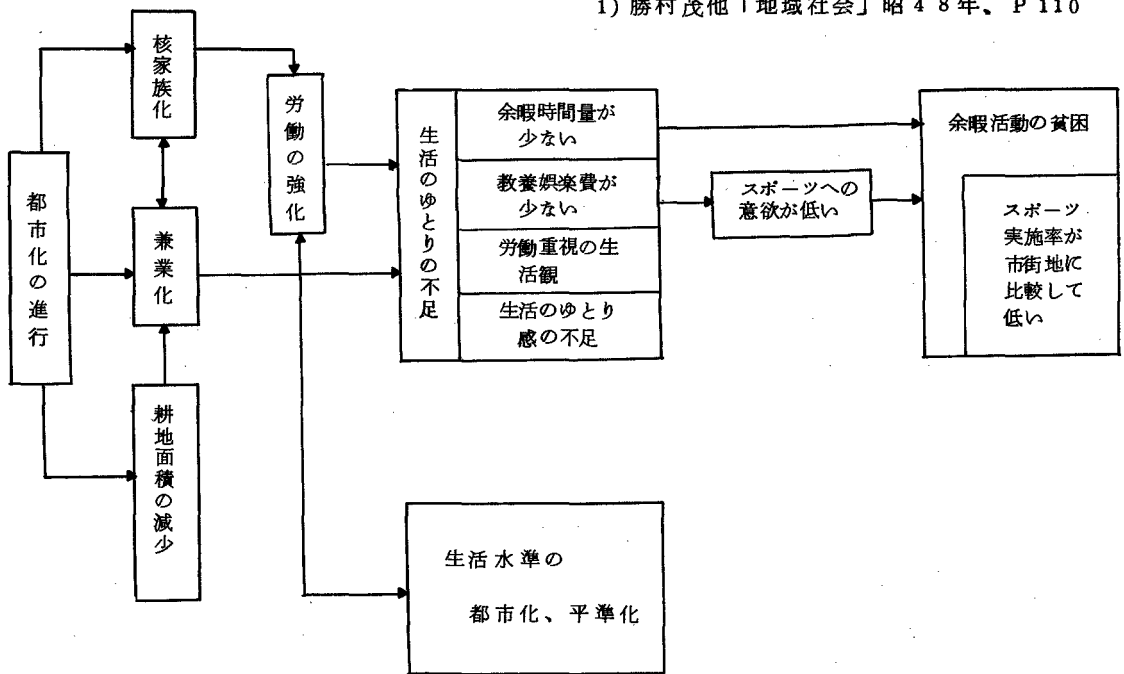


図1 説明図式（都市化が農村のスポーツ実施に与える影響）

くものでなく、まさに「生活のゆとり」に支えられる余暇活動への欲求、余暇活動や余暇のスポーツ実施において農村地区と市街地区の間に格差が生じるのではないか。つまり、農村には農業という直接自然を対象とする生活が核としてあり、先に述べた「都市化が農村に与える諸現象」が、その核を中心として発生する農村的な生活様式を変化させえないばかりでなく「生活のゆとり」の側面をさらに圧迫する面もある以上、都市化の進行は余暇活動における農村—市街間の格差を必ずしもなくするものでなく、行政的に都市といわれる中においても、それぞれの地域特性に注目して地域住民のスポーツ・レクリエーション施策を考慮すべきである、という問題意識から今回の研究は出発している。そのため、昭和39年、45年の2度に渡って実施する機会を得た都市化過程にある地方都市栃木県小山市の住民の余暇活動の内容や欲求等に関する調査結果について、45年調査を中心として上述の説明図式に従って分析を加え、さらに一部39年調査との比較を試みることによって農村地区と市街地区の間にみられる「余暇活動、特に余暇におけるスポーツ実施」の格差の状況を明らかにしようと試みた。なお、39年調査に関しては、すでに江橋、池田両氏によって詳細な報告書が出されており、分析に際してはそれを参考とした。²⁾

II 調査の方法

調査は質問紙法によって昭和39年9月と45年4月に行なった。調査の対象は、標本抽出時点で小山市に在住する満18才以上男女。

抽出の方法は、両調査とも、まず小山市を市街地区と農村地区に層化し、小山市の市街と農村の人口比率を考慮しながら確率比例的に抽出

地点を決定、次に各抽出地点から住民登録台帳によって一定の抽出間隔で最終標本を抽出するという副次抽出法を用いた³⁾。調査票は小山市社会教育課を通して調査対象に配布された。割当て標本数と回収標本数は次のとおりである。

年度	割当て標本数	抽出比	有効回収標本数(率)
39	634	1:20	413(65.1)
45	1500	1:8	947(63.1)

III 小山市の都市化

最初に今回の調査対象である栃木県小山市について都市化の観点から若干の考察を加えておく。

小山市は、栃木県の南部に位置し、関東の米どころといわれる肥沃な水田地帯を持つ農村都市として、また東北本線、両毛線、水戸線の3線が交錯する交通の要所として発展して来た。しかし、昭和37年6月の首都圏整備委員会による市街地開発区域指定、小山市街開発組合の設立、工業団地の造成等々の事業により、近年東京の工業衛星都市として栃木県下屈指の工業都市としての発展をとげつつある。

(1) 人口の増加

表1は小山市の人口動態を表わしている。

第1回調査時の翌年、国勢調査年度40年度の小山市の総人口は90,632人であった。しかし2回目の調査時45年には105,346人となり栃木県下では宇都宮、足利両市に次ぐ人口規模を示している。しかも、この間の増加率は16.2%であり、宇都宮市の13.4%を上回って県下で最大の増加率である。また、このうち社会増は19,232人であり、これは小山市全人口の18.3%を占め県下では最大の割合を示している。人口密度や人口の増加に相反した

2) 江橋、池田他「小山市のスポーツおよびレクリエーションに関する調査報告書」昭40年

3) 安田三郎「社会調査の計画と解析」
昭45年 P 17

「1世帯当り人員」の減少は都市特有の核家族化の傾向のあらわれといえよう。

表1 小山市の人口動態

	S40年	S45年	備考
総人口	90,632	105,346	1位宇都宮301,231 2位足利市156,904
増加率*	8.6%	16.2%	2位宇都宮13.4%
人口指数	108.8	126.2	S35年100
人口密度	521.5/Km ²	606.2/Km ²	S35年480.3/Km ²
1世帯当り人員	4.74	4.21	S35年5.4
社会増**		19,232 (18.3)%	2位宇都宮16.2%

* S40年度の増加率は35年時よりのもの、45年は40年時よりの増加率
 ** S40年1月以降小山市に他市町村、県、国から移住してきた者、%は総人口に占める割合

(2) 産業構造

次に、この都市化の傾向を産業構造の側面からみると、第1次産業（小山市の場合その99%は農業）従事者の激減と第2次・第3次産業従事者の増加という、いわゆる都市の人口率の増加の過程にあることがわかる（図2）。

	第1次産業	第2次産業	第3次産業
S35	48.7	21.7	29.6
40	39.4	30.3	30.3
45	29.4	38.0	32.6

図2 産業別人口比

第一次産業から第2次、第3次産業への人口移動は、その背景として商業、工業の発展、農林業などの後退が考えられる。36年3月「小山市街開発組合」の設立、同年4月の「小山工業

4) 人口動態に関するデータは「昭和45年度国勢調査報告・第3巻その9、栃木県」によるものである。以下、特に示さないかぎり、小山市の都市化に関するデータは、すべてこの報告書による。

5) 35年データは、江橋、池田両氏による報告書「小山市のスポーツおよびレクリエーションに関する調査報告書」昭和40年

団地」の設立、それに伴う企業の誘致成功、さらに37年の首都圏整備委員会による「市街開発7ヶ年計画」の発表など小山市は飛躍的に農村の都市からの脱皮をとげつつあり、工業製品の出荷額も大幅な増加を示している（図3）

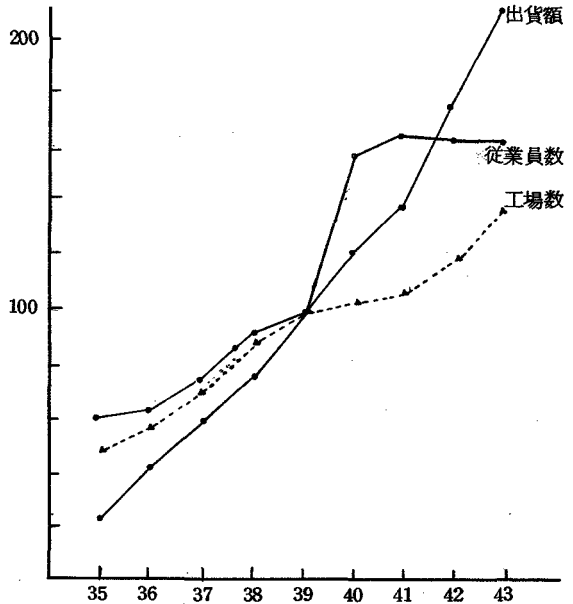


図3 工業製品出荷額・工場数・従業員の推移

小山市の商業は従来農村対象であったために活発な動きはみられなかったが、上述したような人口の増加、集中、工業の発展により徐々にその性格を変容してきている。流通機構の変革に伴う大型店舗の出現、専門店化、チェーン化などの流通の近代化が促進されつつあり図4にみられるとおり年間商品販売額も飛躍的に増大している。

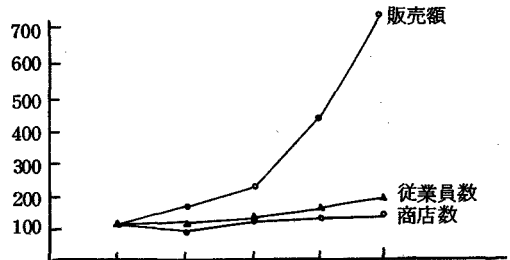


図4 商店数・従業員数・年間商品販売額の推移

6) この図に用いたデータは、小山市統計局による「小山市制15周年記念誌 昭44

(3) 農村的機能要素の後退

さて、工業衛星都市として農村的都市から大きく変貌をとげつつある小山市において、農業は45年現在、なお就業者人口の29.1%、戸数で29.4%を占めて依然として小山市の産業に大きなウェイトを占めている。しかし、工業都市化に伴ない必然的に若い労働力は農業外就業に移行し、また工業用地、宅地造成等による耕地面積の減少と農業の零細化、兼業化が目を追うごとに強まる傾向にある。

表2は農家戸数の推移をみたものである。35年を100とすると、農家戸数全体では40年96、45年93と減少はわずかであるが、それに対して専業農家戸数は40年53、45年27であり急激な減少傾向を示している。逆に、

表2 農家戸数の推移

	S 35	40	45
農家戸数	7580(100)	7308(96)	7094(93)
専業農家戸数	3594(100)	1900(53)	959(27)
兼業農家戸数	3986(100)	5408(135)	6135(154)

兼業農家戸数は40年135、45年154と大幅な増加を示している。しかも、専業農家の減少は1戸当りの耕地面積の増加にはつながらず(35年1.33ha、40年1.31ha、43年1.31ha)、結局農家は経営規模を停滞させたまま兼業化を強めることにより都市化に対応しているものであり、そこから、農家戸数の減少率の相対的停滞や高齢化、女性化といった問題がひきおこされている⁷⁾。また、兼業化は核家族化とあいまって農家の労働力の減少による農業の労働強化の一因となっている。

表3は農業就業者人口、年齢階級別農業就業者人口であるが、農業就業者の減少、高齢化の状況を表わしている。

表3 農業就業者数とその年齢構成

	S 40年	S 45年
農業就業者数	17274(39.2%)	15583(29.1%)
10代	629(3.6%)	443(2.8%)
20代	2574(14.9%)	2151(14.0%)
30代	4516(26.2%)	3176(20.4%)
40代	4070(23.5%)	4521(29.1%)
50代	3059(17.7%)	3040(18.8%)
60~	2396(13.8%)	2252(14.4%)

IV 調査の結果

このような都市化過程にある小山市住民の余暇活動に関する調査結果は以下のとおりである。図5は、ふだんよく行う余暇活動を多肢選択法でたずねたものである。男女とも農村地区が昼寝・ゴロ寝に高い値を示している。

男は53.0%—34.4%、女は40.2%—18.5%といずれも0.1%水準で有意な差があ

表4 基本的項目(S45) 5)

項目	カテゴリー	市街地区		農村地区	
		男	女	男	女
性別		395	345	100	107
年齢	10代	26 (66)	23 (67)	7 (70)	9 (84)
	20代	126 (31.9)	105 (30.4)	22 (220)	21 (19.6)
	30代	95 (241)	83 (241)	21 (210)	19 (17.8)
	40代	71 (180)	73 (212)	17 (170)	26 (24.3)
	50~	77 (19.5)	61 (17.7)	33 (330)	32 (29.9)
学歴	小・中	150 (380)	143 (414)	60 (600)	69 (645)
	高・旧中	163 (41.3)	168 (48.7)	28 (280)	26 (24.3)
	大・旧高	72 (18.2)	22 (64)	3 (30)	2 (1.9)
	不明	10 (2.5)	12 (3.5)	9 (90)	10 (9.3)

る。スポーツ・軽い運動は男女とも市街地区が高い値を示している(男19.5%—8.0%、女4.3%—0.9%)ものの有意差はみいだせない。

7) 勝村茂他「地域社会」昭48 P113

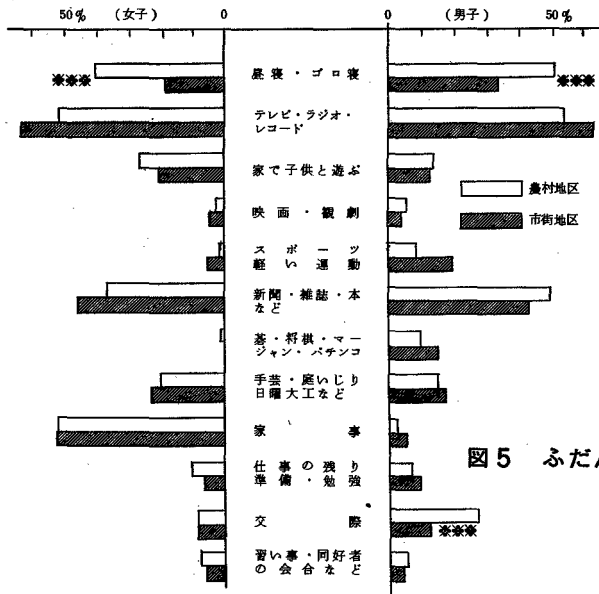


図5 ふだんの余暇活動 (S45)

表5. 地区別にみたスポーツの実施程度 (%) S39

	39	N	よくやる	時々やる	あまりやらない	全然やらない	無記
男	市男	105	15.2	45.7	19.0	16.2	3.8
	農男	83	10.8	24.1	25.3	33.7	6.0
女	市女	107	2.8	28.0	28.0	37.4	3.7
	農女	100	2.0	8.0	27.0	57.0	6.0

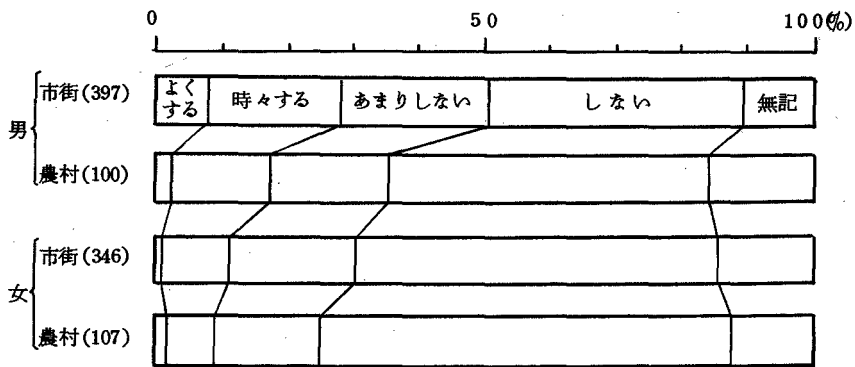


図6. 地区別にみたスポーツの実施程度

しかし、余暇におけるスポーツ実施の割合を4段階評価尺度でたずねると(図6)市街地区の男が「よくする+時々する」に29.8%の割合を示し、農村地区の18.0%を上回っており5%水準で有意な差を示している。女は市街、農村地区ともに低い実施率であり差はない。この傾向は39年調査でも同様である。質問形式が若干違うため正確な時系列比較はできないが、余暇活動全体においては休息・マスコミの接触到農村地区男が1%水準の有意差を示して市街地区男を上回っている。余暇のスポーツ実施においては男女とも0.1%水準の有意差を示し、市街地区が農村地区を上回って高い実施率を示

している(表5)

次に、スポーツをしない理由をたずねたのが表6である。「嫌いだから」とする者は男は17.9% - 5.2% (0.1%水準で有意)、女は13.0% - 5.8% (5%水準で有意)と男女共通して農村地区が高い値を示している。さらに「体によくない」でも農村地区男が市街地区男を上回っている(10.3% - 1.2%、0.1%水準で有意)。逆に、「機会がない」では男女共通して市街地区が農村地区を上回っている(男18.8% - 2.6%、女24.6% - 6.5%、いずれも0.1%水準で有意)。次に、「嫌い+体によくない」をスポーツ参加意欲が低いもの、す

表6 スポーツをしない理由(スポーツをしない群のみ集計) S 45

	N	きらい	体によくない	時間なし	金なし	相手場所なし	指導者いない	機会なし	その他	無記
市男	250	5.2	1.2	34.4	0.8	14.4	1.2	18.8	8.4	15.6
農男	78	17.9	10.3	35.8	0.0	6.4	1.3	2.6	6.4	19.3
市女	276	5.8	3.3	25.4	1.1	14.5	2.2	24.6	9.8	13.3
農女	92	13.0	9.8	34.8	1.1	12.0	4.3	6.5	5.4	13.1

表7 スポーツをしない理由(スポーツをしない群のみ集計) S 39

39	N	きらい	体によくない	時間なし	相手場所なし	機会なし	その他	無記
市男	36	5.6	16.7	30.5	8.3	13.9	13.9	11.1
農男	50	14.0	2.0	42.0	8.0	10.0	14.0	10.0
市女	68	7.4	0.0	51.5	11.8	14.7	8.8	5.9
農女	85	10.6	4.7	44.7	3.5	12.9	14.1	9.4

なわち、機会や場所、時間等の条件が満たされても容易にスポーツ実施に結びつかないものとして捉え比較すると、男女とも農村地区が市街地区を上回っており0.1%水準で有意な差がみられる。39年調査においては、男女とも「嫌いだから」とするものは農村地区に多く、「体によくない」とするものが45年とは逆に市街地区に多いという若干の傾向がみられるものいずれも有意な差ではない(表7)。

以上の結果をまとめてみると、農村地区の人々は市街地区の人々に比較してスポーツ参加意欲が低く、スポーツの実施率も低い、逆に昼寝やゴロ寝の休息的活動が高いという結果となった。しかも、この傾向は39年調査時も同様であり、いいかえれば、先に表1等でみた都市化の諸現象は余暇活動における市街農村のこの格差を必ずしもなくするものでなく、スポーツ参加意欲に関していえば、その格差を増々助長す

表8 小山市のスポーツ振興への提言 S 45

	N	くらしのゆとり	ひまな時間	場所や施設	仲間やクラブ	指導者	大会・行事	その他	無記
市男	395	9.4	4.8	49.1	8.4	6.6	8.4	1.5	11.9
農男	100	24.0	7.0	22.0	9.0	5.0	12.0	4.0	17.0
市女	345	7.8	4.1	45.8	10.7	5.8	5.5	0.0	20.3
農女	107	26.2	6.5	14.0	10.3	11.2	6.5	0.9	24.3

表9 小山市スポーツ振興への提言 S 39

39	N	くらしのゆとり	ひまな時間	場所や施設	仲間やクラブ	用具	指導者	大会・行事	その他	無記
市男	105	24.8	8.6	35.2	3.8	0.0	15.2	4.8	0.0	7.6
農男	83	42.2	9.6	19.3	1.2	2.4	3.6	6.0	0.0	15.7
市女	107	27.1	8.4	27.1	9.3	0.0	9.3	5.6	0.0	13.0
農女	100	39.0	13.0	16.0	3.0	2.0	6.0	3.0	1.0	17.0

る結果となった。

くらしのゆとり

それでは、農村地区と市街地区の間のこのような差はどうして生じたのであろうか。

表8は、小山市のスポーツ活動をさかんにするために現在最も必要なものはなにかをたずねたものである。「くらしのゆとり」とするものは男女とも農村地区が上回っている(男24.0% - 6.8%、女26.1% - 7.8%、いずれも0.1%水準で有意)。これに対し「場所や施設」という直接的条件の満足を望むものは市街地が多い(男49.1% - 22.0%、女45.8% - 14.0%、いずれも0.1%水準で有意)。

しかも、「くらしのゆとり」と「場所や施設」にみられる差違は39年調査においても同様であり、「くらしのゆとり」は男42.0% - 24.8%、5%水準の有意差、女39.0% - 27.1%、1%水準の有意差で男女とも農村地区が高い割合を示し、「場所や施設」は市街地区男が35.2%で農村地区男の19.3%を上回って5%水準の有意差を示している。また「指導者」をあげるものも市街地区男子に多くなっている(市街男15.2% - 3.6%、農村男、5%水準で有意)(表9)。このように、市街地区の人々は「場所や施設」、「指導者」などのスポーツ活動の直接的条件の満足、農村地区の人々は「くらしのゆとり」というスポーツ活動の根底的基盤の満足を望む者が多いという結果が得られた。このような参加条件の違いが先のスポーツ意欲、ひいてはスポーツ実施の格差を導いたのではないかと考えられる

そこで、表10 1カ月の休める日数 S45

「くらしのゆとり」を構成するファクターとし	N	4日以上	3日以内	無記
市男	395	60.5	32.2	7.3
農男	100	45.0	40.0	15.0
市女	345	41.2	45.2	13.6
農女	107	38.3	43.0	18.7

て、今回、「休暇、休日、平日の余暇時間量」、「生活観」、「教養娯楽費」をとりあげた。表10は1カ月の休める日数をたずねたものである。「月4日以上」と答えたものは市街地区男60.5%、農村男45.0%であり5%水準の有意差で市街地区男が上回っている。女には顕著な差はない。次に、そのような休日に本当にくつろげる時間は何時間あるかをたずねると(表11)、3時間未満とするものは男女とも農村地区に多く(男0.1%水準で有意、女5%水準)

表11 休日余暇時間量 S45

	N	3時間未満	5時間未満	7時間未満	7時間以上	無記
市男	395	4.8	14.7	25.1	40.0	15.4
農男	100	14.0	15.0	20.0	20.0	31.0
市女	345	12.5	24.6	20.0	22.9	20.0
農女	107	17.8	18.7	14.0	11.2	38.3

で有意)、7時間以上とするものは市街地区の男子に多い(1%水準で有意)。最後に、平日の余暇時間量をたずねたのが表12である。3時間を境としてこれをみてもみると、3時間以上とするものは男女とも市街地区に多い(男5%水準で有意、女1%水準で有意)。しかも、この傾向は図7をみてもわかるとおり~29才までの若い層に男女とも多い。39年調査においては、休日数や休日余暇時間量に関する質問項目はない。平日余暇時間量に関しては、市街地区-農村地区の間に有意な差はなかった(表13)。都市化の進行にともなう兼業化や核家族化の影響はまず農業外就業の人達によっては余暇が農作業によって消費され、一方農業就業者にとっては、少ない労働力による過重労働となつてあられ、市街地区の人々に比較して、時間的な側面からの「生活のゆとり感」の不足を持たらすのではないか。

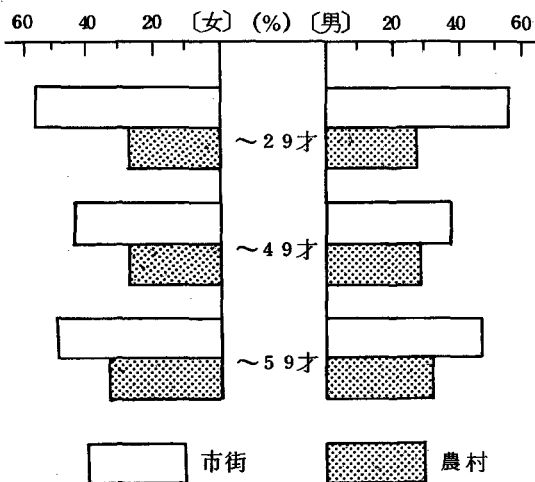
表 12 平日余暇時間量 S 45

	N	1時間未満	2時間未満	3時間未満	4時間未満	4時間以上	無記
市男	395	2.5	11.4	23.5	24.6	21.3	16.7
農男	100	2.0	18.0	24.0	14.0	15.0	27.0
市女	345	1.2	7.8	24.9	22.6	24.3	19.2
農女	107	0.0	17.8	25.2	12.1	15.9	29.0

表 13 平日余暇時間量 S 39

	N	2時間未満	3時間未満	4時間未満	5時間未満	5時間以上	無記
市男	105	27.6	31.4	21.9	12.3	5.7	1.1
農男	83	21.7	31.3	25.3	9.6	9.6	2.4
市女	107	26.2	23.4	20.6	14.0	13.1	2.8
農女	100	27.0	27.0	21.0	11.0	12.0	2.0

図 7 平日余暇時間3時間以上



このように、農村地域の人々にとって都市化は直線的な余暇時間量の増加にはつながらず、兼業化や核家族化の進行による農業労働力の減少によってかえって農業労働は激しいものとなる。そして、それはかえって労働重視の生活観を強くするのではないか。表 14 は余暇-労働観をたずねたものである。「遊ぶひまに仕事」

と「仕事の許す範囲で遊ぶ」を仕事重視の生活観「余暇を積極的に過すことは仕事のためにもよい」と「余暇こそ人生の目的」を余暇重視の生活観として比較すると、農村地区男が仕事重視の余暇観において市街地区男を上回っている(男 43.0% -

30.6%、1%水準で有意)。女には顕著な相違はない。しかし、「余暇こそ人生の目的」と

表 14 余暇観 S 45

	N	遊ぶひまに仕事	仕事の許す範囲で	余暇は仕事のためにもよい	余暇こそ人生の目的	無記
市男	395	2.0	28.6	44.8	15.4	9.1
農男	100	3.0	40.0	26.0	18.0	13.0
市女	345	2.9	32.2	41.5	11.6	11.9
農女	107	5.6	27.1	33.6	23.4	10.3

するものをみると、農村地区が市街地区を上回って高い値を示している(23.4% - 11.6%、1%水準で有意)。この結果は、農家の女性の労働の激しさから考えて意外な感があるが、表 15 によって年代別にこれを見ると、農作業の主な担い手となる 30~49 才の女性が最も高い値(0.1%水準で有意)を示し、それに対して 10代、20代は低い値である。このことから労働が激しく余暇をとりにくい状況にあるからこそ、逆に極端な余暇志向を示したものとも解釈できる。39年調査においては、「収入志向、余暇志向」をたずねたのであるが(表 16)、収入より余暇を望むものは、市街地男に多かった。

表 15 年代別女子・余暇＝人生の目的 S 45

	～19		～29		～39		～49		～59		60～	
	市	農	市	農	市	農	市	農	市	農	市	農
N	23	9	105	21	83	19	73	26	32	14	29	18
余暇こそ人生の目的	21.7	0.0	13.3	4.3	4.8	36.8	16.4	30.8	9.4	28.6	6.9	16.7

V 総括

以上、「市街地区」と「農村地区」の余暇活動、なかでも余暇

表 16 収入志向とヒマ志向 S 39

39	N	収入よりヒマ	ヒマより収入	わからない	無記
市男	105	46.7	31.4	11.4	10.5
農男	83	24.1	49.5	14.5	11.9
市女	107	29.9	34.6	20.6	15.0
農女	100	40.0	30.0	21.0	9.0

におけるスポーツ実施には

1. 都市化の進展にもかかわらず格差があり「農村地区」は「市街地区」に比較して、スポーツ実施率は低く、逆にゴロ寝等の休息活動が多くなっている。
2. そして、これは経済的側面の都市化ではとらえられない「生活のゆとり感」の不足から来たものである。

最後に、1カ月の教養娯楽費をたずねたのであるが、これは農村―市街間に差がみいだせなかった。兼業化により農業外所得は増加し、消費支出構成も農業従事者と他産業従事者の間に差のないことは、各種の統計資料の示すとおりであり⁸⁾、農村地区―市街地区の経済的側面の「生活のゆとり」の差違はあまりみられない。

3. しかも、この「生活のゆとり感」の不足は、都市化過程にある農村のまさにその現実から来たものである以上、都市化の進展によって必ずしも解消するものではない。以上のような、都市化の進展にともなう傾向があることを説明図式に従って明らかにした。

8) 至誠堂「国民生活統計年報」47 P58～60

参 考 文 献

- 1) 勝村茂他：「地域社会」昭48年学陽書房P110
- 2) 江橋、池田他：「小山市のスポーツおよびレクリエーションに関する調査報告書」昭40年
- 3) 安田三郎：「社会調査の計画と解析」昭45年、丸善 P17
- 4) 「昭和45年度国勢調査報告書、第3巻その9、栃木県」
- 5) 小山市役所：「『小山』市制15周年記念誌」昭44年
- 6) 勝村茂他：「地域社会」昭48年、学陽書房、P113
- 7) 至誠堂：「国民生活統計年報」昭47年 P58～60
- 8) 江橋、守能他「小山市のスポーツおよびレクリエーションに関する調査報告書」昭46年
- 9) 園田恭一：「地域社会論」昭47年、日本評論社 P123～124
- 10) 蓮見音彦他：「社会学講座4、農村社会学」昭48年 P177～182
- 11) 有斐閣：「社会学事典」昭46年 P730
- 12) 江橋、松島他：「社会体育」昭47年、第一法規、P74～77

学校レクリエーションの研究

—福岡県下の高等学校体育祭・運動会
の現状と問題点について—

福岡教育大学 秋 吉 嘉 範

はじめに

運動会が始まったのは明治10年頃で、その歴史は長い。その後いろいろの歴史的変遷を経て今日に至っている。いずれにしてもその時代の要請や社会的背景によって、目標や内容が変わっている。ところが、どの時代にも共通しているのは、競技的性格とレクリエーション的性格を持続してきたことである。

さて、現在の高等学校では、運動会は教科外の教育活動の一領域である体育的行事として位置づけられている。ということは、運動会や体育祭の果す教育的役割を高く評価してのことであろう。

ところが近年の高等学校の運動会や体育祭は形式化、固定化して楽しくないといわれている。また、地域社会との関連も少なくなったようである。そこで、教師や生徒が自らの手で企画、運営し、喜んで参加し、満足感を味わうことの出来る運動会や体育祭が考えられないだろうか、学校レクリエーションという観点から検討してみたい。

I 研究の目的

学校レクリエーション研究の一環として、高等学校における体育祭や運動会の現状を調査し、問題点を明らかにして、学校行事としての体育祭や運動会のあり方を検討しようとするものである。

II 調査の対象・方法・時期

1. 対 象

福岡県下の公立及び私立の高等学校125校を対象に調査票を配布した。回答を得たのは102校、回収率は81.6%である。

2. 方 法

質問紙法による。調査票の記入は保健体育科教師(主任)に依頼した。集計は公立普通校53校、公立実業校28校、私立校21校に分けて行なった。なお概要を知るために調査校全体102校についても集計した。

3. 時 期

昭和47年9月から11月までである。

III 結果と考察

1. 実施状況

表1によると、体育祭や運動会を実施しているのは87校85.3%、実施していないのは15校14.7%である。実施していないのは公立普通校7校、公立実業校7校、私立校1校で

〔表1〕 体育祭や運動会の実施状況

	公立普通校		公立実業校		私立校		全体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
実施している	46	86.8	21	75	20	95.2	87	85.3
実施していない	7	13.2	7	25.0	1	4.8	15	14.7
計	53	100	28	100	21	100	102	100

ある。実施していない理由として、クラスマッチに切り替えたが6校、全校登山に替えたが1校、文化祭及びクラブ祭にしたのがそれぞれ1校である。大牟田市内の6校は学校独自では実

施せず市内全校で、連合体育大会を年2回開いている。そのため各校は予選をかねた競技会を実施している。全体的にみると、実施している学校が断然多い。また、実施していない学校でも内容的には、体育・レクリエーション行事として別の形でとりあげているようである。

2. 名称について

現在、名称は高等学校によりまちまちである。一般に体育祭、運動会が多い。

表2によると、体育祭が44校50.5%である。ついで、体育大会23校26.4%、運動会10校11.5%、体育会と競技会がそれぞれ5校5.8%である。体育祭という名称は私立校に多い傾向がある。また私立校には運動会という名称はみあたらない。このような名称は内容を示す場合が多い。(注)以下体育祭や運動会という場合、体育会や競技会を含めて呼ぶことにする。

〔表2〕 名 称

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
運 動 会	8	17.4	2	9.5	-	-	10	11.5
体 育 祭	20	43.5	10	47.7	14	70.0	44	50.5
体育大会	13	28.3	6	28.5	4	20.0	23	26.4
体 育 会	2	4.3	2	9.5	1	5.0	5	5.8
競 技 会	3	6.5	1	4.8	1	5.0	5	5.8
計	46	100	21	100	20	100	87	100

3. 実施時期

表3によると、9月～10月に実施しているのが82校85.3%であり、残りの5校は5月～6月に実施が3校、また春秋2回に分けて実施が2校である。ところが9月～10月実施には問題も多い。まず夏休み終了直後で生徒が規則的な学校生活に慣れていないこと。第二に残暑がまだきびしく、生徒の健康面からみて必ず

〔表3〕 実施時間

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
9～10月	42	91.4	21	100	19	95.0	82	94.2
春秋(2回)	2	4.3	-	-	-	-	2	2.3
5～6月	2	4.3	-	-	1	5.0	3	3.5
計	46	100	21	100	20	100	87	100

しもよい時期でないこと。第三に生徒に企画や運営をさせる場合、時間的に短かすぎるなどである。しかし、一方では体育祭や運動会を早く終らせ、大学受験や就職のための勉強に専念させたいという意図も十分伺える。いずれにしても、生徒が健康で喜んで参加できる時期を検討する必要がある。悪い慣例であれば打破する勇気が欲しい。筆者は5月か11月初旬頃が季節的に最もよい時期ではないかと考える。

4. 実施回数

実施回数は年1回実施が66校75.9%である。公立、私立を問わず多い。年2回実施は3校3.5%、また2年に1回は12校13.8%、3年に1回は2校2.3%。3年に2回は4校4.5%となっている。隔年実施の場合、文化祭と交互に実施しているようである。実施回数は質量によって違うであろうが、年1回はぜひ実施したいものである。

5. 実施日数

〔表4〕 実施日数

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1日型	36	78.3	20	95.2	18	90.0	74	85.1
数日型	9	19.5	1	4.8	2	10.0	12	13.7
無記不明	1	2.2	-	-	-	-	1	1.2
計	46	100	21	100	20	100	87	100

表4によると実施日数は、1日型が74校85.1%と断然多い。2～3日以上にまたがる

教日型は12校13.7%である。教日型は2～3日球技などのクラスマッチを行ない最終日にまとめるような形式で実施している。このような形式で行なえば、クラスマッチと体育祭や運動会を総合的にでき、別々に行なうより、準備や練習なども一度ですむという利点がある。

また、逆に長期間に亘るため運営上盛りあがりに欠けたり、中だるみ現象を起すこともあるようである。

6. 実施日及びその理由

実施日が平日であるか、休日であるか調べたのが表5である。表5によると、平日実施は44校50.6%である。休日実施は42校48.2%である。その内容は公立普通校、実業校及び私立校ともほぼ半々である。平日、休日と決めていない学校は1校である。平日実施の学校のなかで休日から平日へ切り替えた学校が18校20.7%ある。逆に平日から休日へ切り替えた学校は私立校3校だけである。従来は休日実施が断然多かったが、この調査では平日実施が大幅に増加している。

〔表5〕 実施日（平日か休日か）

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
平日	13	28.3	6	28.5	7	35.0	26	29.9
休日から平日へ	10	21.7	5	23.8	3	15.0	18	20.7
休日	23	50.0	9	42.9	7	35.0	39	44.8
平日から休日へ	-	-	-	-	3	15.0	3	3.4
どちらもある	-	-	1	4.8	-	-	1	1.2
計	46	100	21	100	20	100	87	100

平日に実施する理由として、「教科体育の延長であるため」が44校中19校である。ついで「特別に理由はない」が12校、「教師の勤務条件に都合がよいため」が7校、「その他、無記不明」が11校である。その他のなかには学校行事であるため、他の行事との関係のため、

一般の人々の整理に困るため、キリスト教系学校であるためなどである。

一方、休日に実施する理由は、「父兄に多く参加してもらうため」が42校中23校、ついで、「生徒や父兄の要望」が7校「地域社会の要望」が6校、「特別に理由はない」が16校「無記不明」が1校である。

さて、最近福岡県教育委員会の調査によると、父兄を含む地域社会の人たちは休日実施を断然希望しているようである。

平日か休日かを考える場合、問題になるのは、特別に理由がないという28校の主体性のなさである。体育祭や運動会は生徒の日頃の体育・スポーツ活動状況を父兄や地域社会の人々にも知ってもらうよい機会である。また、父兄や地域社会の人たちとの親善を深めることもできると考えるならば、平日より休日の方が多くの人への参加が期待できる。問題は教師の勤務条件であるが、年間1～2回の休日出勤は振替え休日によって補償されるはずである。

一方、学校行事の一つとしての校内発表会と考えるならば、わざわざ休日に実施しなくてもよい。生徒自身が競い楽しむのだから、父兄や地域社会の人たちの参加は望まないというなら平日でもよいだろう。

平日か休日のどちらに実施するかは、体育祭や運動会をどのような性格や目的で行なうかによって決定される。その場合、父兄や地域社会の要望や意見にも耳を傾けて欲しい。最終的にはその学校の主体性によって決定されるべきであり、その間の検討が十分なされるべきである。学校レクリエーションの立場から考えると平日でも休日でもよい、むしろ教師や生徒が一体となって、体育祭や運動会の目的を検討し、それに見合う企画、運営にあたることこそ大切である。

7. 目標について

さて、体育祭や運動会をどのような目標で行なうかは重要な問題である。

〔表6〕 目標について

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	46校	%	21校	%	20校	%	87校	%
運動意欲の向上と体力の充実を図る	17	37.0	14	66.7	7	35.0	38	43.7
運動への関心や理解を深める	11	23.9	3	14.3	2	10.0	16	18.4
集団行動を通して社会性を育成する	28	60.9	9	42.9	14	70.0	51	58.6
生徒会活動を充実させる	25	54.3	12	57.1	10	50.0	47	54.0
教科体育の成果を地域社会に公開する	7	15.2	-	-	4	20.0	11	12.6
その他、無記不明	1	2.2	-	-	-	-	1	1.1

(2項目選択)

表6によると「集団行動を通して社会性を育成する」が51校58.6%と最も多い。ついで「生徒会活動を充実させる」が47校54.0%「運動意欲の向上と体力の充実を図る」が38校43.7%「運動への関心や理解を深める」が16校18.4%「教科体育の成果を地域社会に公開する」が11校12.6%の順である。このことは従来のように地域社会とのつながりが深いものでなく、学内の単なる行事として行なう傾向にあるといえる。

いずれにしても目標を定める場合には、どのような性格や目的を持った体育祭や運動会であるかを明らかにし、その目標を生徒に理解させる努力が必要である。

8. 企画、運営について

企画や運営を誰が行なうか調べたのが表7である。表7によると「生徒と教師が協力して行なう」が63校72.4%である。ついで「生

〔表7〕 企画・運営はだれが行なうか

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
生徒が中心に行なう	16	34.8	4	19.1	3	15.0	23	26.4
教師が中心に行なう	1	2.2	-	-	-	-	1	1.2
生徒・教師の協力で	29	63.0	17	80.9	17	85.0	63	72.4
計	46	100	21	100	20	100	87	100

徒が中心に行なう」が23校26.4%、「教師が中心に行なう」はわずか1校である。

教師のアドバイスを受けながら、生徒が中心に企画、運営にあたることは望ましいことである。しかし、準備段階から終了までには、種目の決定、会場や用具の準備、製作、練習や運営方法など多くの仕事があり、これらの準備や運営がスムーズに進行するように、教師と生徒による委員会を組織することが必要である。そのなかで、生徒が自主的に活動できるように、教師が適切な指導をすることである。この指導が学校レクリエーションとしての重要なポイントになるだろう。

9. 準備や練習の日数と体育授業への影響

〔表8〕 準備や練習の日数

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
10日以内	30	65.2	17	80.9	10	50.0	57	65.5
11日～20日	9	19.6	3	14.3	6	30.0	18	20.7
21日～30日	2	4.3	-	-	3	15.0	5	5.8
無記不明	5	10.9	1	4.8	1	5.0	7	8.0
計	46	100	21	100	20	100	87	100

表8によると「10日以内」が57校65.5%ついで「11日～20日」が18校20.7%である。残りは20日以上である。ということは10日以内で行なうのが2/3であることを示す。

練習を行なうための体育授業への影響を調べ

ると「ほとんど影響がない」が35校40.2%「授業が練習時間にふりかえられ学習内容がカットされる」が32.2%「授業によい影響を与え積極的参加」が16校18.6%となっている。「練習で疲れて授業に悪い影響を与える」はわずか2校である。このことは、年間計画のなかに練習時間を組み込んでいないのではないか。体育祭や運動会を実施する場合、当然準備や練習の時間が必要である。学校行事の1つである以上、年間計画を作成する場合に、練習時間を組み入れること、その時期に体育授業の教材、例えば体操、ダンス、陸上競技などのカリキュラムをたてるべきである。また、生徒が疲労しないよう無理な練習はさけること、そのためには効果的な練習や準備によって、運動への関心や理解を深め、授業への積極的参加などのよい影響を与えるようにすべきである。

10. プログラムについて

体育祭や運動会のプログラムづくりは、学校レクリエーションとして重要なポイントになる。

さて、プログラムは誰れが作成するかを表9〔表9〕 プログラムはだれが作成するか

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
生徒(会)	23	50.0	12	57.1	6	30.0	41	47.2
生徒と教師	21	45.7	9	42.9	11	55.0	41	47.2
教 師	2	4.3	-	-	3	15.0	5	5.6
計	46	100	21	100	20	100	87	100

でみると、「生徒(会)中心」が41校47.2%、また「生徒と教師」が同じく41校47.2%である。「教師」が5校5.6%と極めて少ない。従来は教師中心にプログラムを作成していたが、現状では生徒の意向を十分反映していることがわかる。レクリエーション行事としては大切なことである。

表10はプログラム(種目)性格別内容を示

〔表10〕 プログラムの性格別内容

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
イ 競技的種目中心	17	37.0	8	38.1	9	45.0	34	39.1
ロ レクリエーション的種目中心	14	30.4	6	28.5	1	5.0	21	24.1
ハ 発表会的種目中心	1	2.2	-	-	-	-	1	1.2
ニ 競技的種目とレクリエーション的種目を半々	7	15.2	4	19.1	5	25.0	16	18.4
ホ 総合的(イロハを含む)	7	15.2	3	14.3	5	25.0	15	17.2
計	46	100	21	100	20	100	87	100

したものである。表10によると「競技的種目中心」に行なっている学校は34校39.1%で最も多い。ついで「レクリエーション的種目中心」に行なっている学校は21校24.1%である。レクリエーション的種目を行なっている学校は私立校よりも公立校に明らかに多い。

「発表的種目中心」に行なっている学校は公立普通校1校だけである。

「競技的種目とレクリエーション的種目を半々」に行なっている学校は16校18.4%、「各種目を総合的」に行なっている学校は15校17.2%である。こうしてみると、調査校の半数以上の学校が、競技的性格とレクリエーション的性格の強い体育祭や運動会を行なっているといえる。

〔表11〕 プログラムの種目内容

	体育祭13校		運動会6校		体育大会17校		全体36校	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
イ 陸上競技	56	22.5	40	29.0	121	36.9	217	30.4
ロ 球技・格技	-	-	-	-	26	7.9	26	3.6
ハ 体操・組体操・ダンス・マ스ゲーム	26	10.4	29	21.0	41	12.5	96	13.4
ニ レクリエーション的種目	121	48.6	46	33.3	98	29.9	265	37.0
ホ クラブ紹介・仮装行列・応援合戦	30	12.1	12	8.7	25	7.6	67	9.4
職員・父兄への種目	16	6.4	11	8.0	17	5.2	44	6.2
計	249	100	138	100	328	100	715	100

また、調査校のうち入手できた36校のプログラムの内容を分析してみると表11になる。

表11.によると名称は体育祭13校、体育大会17校、運動会6校となっている。内容は陸上競技、球技、格技、体操・ダンス・マスゲーム、レクリエーション的種目(競争遊戯など)、クラブ紹介・仮装行列・応援合戦、職員、父兄の種目に分けた。陸上競技では、短距離、長距離、リレー、ハードル走などであるが、リレーが最も多い、また、走り高とび、走り巾とび、砲丸投なども行なわれている。球技では、ソフトボール、バスケットボール、バレーボール、ハンドボール、サッカー、卓球、テニスなどである。レクリエーション的種目では、障害物競走、百足競走、パン食い競走、借り物競走、綱引き、棒倒し、騎馬戦などである。仮装行列や応援合戦なども考え方によってはレクリエーション的種目に入るが、ここでは一応別にした。そこで体育祭の内容をみると「レクリエーション的種目」が48.6%、ついで陸上競技22.5%である。しかし、「クラブ紹介、仮装行列、応援合戦」などを含めると、レクリエーション的性格が強いスポーツの祭典であるといえる。運動会はレクリエーション的種目33.3%ついで陸上競技29.0%体操、組体操、ダンス、マスゲーム21.1%の順であり、レクリエーション的性格と競技的性格と発表的性格をもち合せた総合的運動の会といえる。体育大会は、陸上競技36.9%、ついでレクリエーション的種目29.9%であるが、体育祭や運動会にみられない「球技・格技」が7.9%と目立つ。ということは、体育大会はレクリエーション的性格を持っているが、どちらかという競技的性格が強いといえる。

11. 経 費

表12によると費用の出所は「学校予算と生徒会費」が58校66.9%で最も多い。ついで

「学校予算に生徒の一部負担」が26校29.8%である。「学校予算にPTAなどの寄付」は3校3.3%である。

〔表12〕 費用の出所

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
学校予算・生徒会費など	32	69.6	13	61.9	13	65.0	58	66.9
学校予算+PTAなどの寄付	-	-	1	4.8	2	10.0	3	3.3
学校予算+生徒の一部負担	14	30.4	7	33.3	5	25.0	26	29.8
計	46	100	21	100	20	100	87	100

費用の用途は、準備費、用具費、接待費、宣伝費、賞品代などである。生徒会の負担は主に装飾費や応接費などに使われている。一部の学校では生徒の負担金が高額のため問題になったことがある。体育祭や運動会に多額の費用をかけなければ立派なものができないという考えはよくない、むしろ少額の費用で立派な企画や運営をすることが大切である。

12 体育祭や運動会の実施上の問題点

体育祭や運動会を実施する上でいろいろ問題がある。表13はその問題点を示したものである。表13によると、「企画と運営指導」が87

〔表13〕 体育祭、運動会を行なう場合に問題となる点 (2項目選択)

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	46校	%	21校	%	20校	%	87校	%
練習時間の確保	15	32.6	8	38.1	9	45.0	32	36.8
他教科との関係	8	17.4	6	28.6	8	40.0	22	25.3
企画・運営指導	28	60.8	13	61.9	3	15.0	44	50.6
施設・用具の不足	2	4.3	4	19.0	5	25.0	11	12.6
全員参加の問題	14	30.4	3	14.3	7	35.0	24	27.6
費用がゆかぬ	6	13.0	8	38.1	1	5.0	15	17.2
その他・無記不明	3	6.5	1	0.5	3	15.0	7	8.0

校中44校と最も多い。体育祭や運動会はなんともいっても企画、運営が大切で問題になるのは当然である。ついで「練習時間の確保」が32校、また、これに関連して「他教科との関係」が22校みられる。ということは、学校行事でありながら、体育時間に多くのしわよせがくると関連がある。また、練習のために多くの時間を消費することも検討する必要がある。多くの練習を必要としない企画を考慮すべきである。

「全員参加の問題」は24校である。学校規模が大きくなると、全員参加は徒手体操位で、あとは代表や選手参加ということになる。誰もがそれぞれの技量に応じて参加できる手軽な種目、例えばフォークダンスやゲームなどももっと入れるとよいだろう。

さて、「費用がかかる」は15校。「施設、用具の不足」は11校である。費用の問題は、出来るだけかからないように企画の段階で考えることである。施設や用具の不足は、種目内容の範囲を狭めればよい、みる体育祭からする体育祭へ発展させること。最後に一部の教師に負担がかからないように、出来るだけ多くの教師が協力し合って指導すべきである。学校行事であるからには当然のことである。

13. 体育祭や運動のあり方について

〔表14〕 体育祭や運動会のあり方

	公立普通校		公立実業校		私立校		全 体	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
教科体育の発展の場となるようにすべきである	16	34.8	4	19.0	4	20.0	24	27.6
学校の実態や生徒の運動生活に応じて行なうべきである	14	30.4	6	28.6	6	30.0	26	29.9
生徒・教師・父兄間の人間関係を好ましくすることをねらいにすべきである	11	23.9	9	42.9	10	50.0	30	34.5
その他・無記不明	5	10.9	2	9.5	-	-	7	8.0
計	46	100	21	100	20	100	87	100

表14によると、体育祭や運動会のあり方は、「生徒・教師・父兄の人間関係をよくするというねらいで行なうべきである」が30校34.5%と最も多い。ついで、「学校の実態や生徒の運動生活に応じて行なうべきである」は26校29.9%である。「教科体育の発展の場となるようにすべきである」は24校27.6%である。生徒、教師、父兄間の人間関係を問題にするのは公立実業校、私立校に多い傾向があり、教科体育の発展の場にするというのは、公立普通校に多いようである。

さて、体育祭や運動会のあり方には二つの方向が考えられる。一つは運動意欲の向上と体力充実を図り、教科体育の発展の場ともなるような、競技会的、発表会的性格のもの、もう一つは、生徒と教師や父兄間の人間関係の改善をはかること、すなわち、皆んなでスポーツを楽しむというレクリエーション的性格のものである。レクリエーションだからといって、簡単なものだけではない。多少苦しくても成功感や満足感を覚える内容のものも当然含まれる。これら二つの方向(内容)について、それぞれの学校が研究し、学校や生徒の特質に応じて企画すべきである。

要 約

福岡県下の高等学校(公立普通、実業及び私立を含む)102校に、

体育祭や運動会の現状と問題点を調査した。その結果を要約すると、

1. 体育祭や運動会(体育大会を含む)を実施しているのは87校85.3%、実施していないのは15校14.7%である。

2. 名称は体育祭が44

校 50.5%と最も多く、ついで、体育大会 23校 26.4%、運動会 10校 11.5%、体育会と競技会がそれぞれ 5校 5.8%である。

3. 実施時期は 9月～10月が 82校 85.3%、残りの 5校 4.7%は 5月～6月に実施している。

4. 実施回数は年 1回実施が 66校 75.9%、2年に 1回は 12校 13.8%、年 2回実施は 3校 3.5%、3年に 1回は 2校 2.3%、3年に 2回は 4校 4.5%である。

5. 実施日数は 1日型が 74校 85.1%、教日型は 12校 13.7%である。

6. 実施日は、平日が 44校 50.6%、休日は 42校 48.2%、平日、休日と決めていないのが 1校である。平日に実施する理由として、教科体育の延長であるためが 19校、特別に理由はないが 12校、教師の勤務に都合がよいが 7校である。休日に実施する理由として、父兄に多く参加してもらうためが 23校、生徒や父兄の要望が 7校、地域社会の要望が 6校、特別に理由はないが 16校である。

7. 体育祭や運動会の目標は、「集団行動を通して社会性を育成する」が 51校、ついで「生徒会活動を充実させる」が 47校、「運動意欲の向上と体力の充実を図る」が 38校、「運動への関心や理解を深める」が 16校、「教科体育の成果を地域社会に公開する」が 11校である。

8. 企画、運営は「生徒と教師が協力して行なう」が 63校 72.4%、ついで「生徒が中心に行なう」が 23校 26.4%、「教師が中心に行なう」は 1校である。

9. 準備や練習の日数は「10日以内」が 57校 65.5%、ついで「11～20日」が 18校 20.7%、残りは 20日以上である。

練習を行なうための体育授業への影響は、「ほとんど影響がない」が 35校 40.2%、「授業

が練習時間にふりかえられ学習内容でカットされる」が 32.2%、「授業によい影響を与え積極的参加」が 16校 18.6%、「練習で疲れて授業に悪い影響を与える」はわずか 2校である。

10. プログラムの作成は「生徒(会)中心」と「生徒と教師」がそれぞれ 41校 47.2%である。「教師のみ」は 5校 5.6%である。

プログラムの性格別内容をみると、競技的種目中心は 34校 39.1%、ついで、レクリエーションの種目中心は 21校 24.1%、発表的種目中心は 1校である。また、競技的種目とレクリエーション的種目を半々に」は 16校 18.4%各種目を総合的には 15校 17.2%である。

11. 費用の出所は「学校予算と生徒会費」が 58校 66.9%、「学校予算に生徒の一部負担」が 26校 29.8%、「学校予算に P T A などの寄付」は 3校 3.3%である。

12. 体育祭や運動会の実施上の問題点として、「企画、運営指導」が 44校 50.6%、ついで「練習時間の確保」が 32校 36.8%、また「他教科との関係」が 22校 25.3%「全員参加の問題」が 24校 27.6%、「費用がかかる」が 15校 17.2%、「施設・用具の不足」が 11校 12.6%である。

13. 体育祭や運動会のあり方をみると、「生徒・教師・父兄間の人間関係を好ましくすることをねらいにすべきである」が 30校 34.5%、ついで「学校の実態や生徒の運動生活に応じて行なうべきである」が 26校 29.9%、「教科体育の発展の場となるようにすべきである」が 24校 27.6%である。

あ と が き

学校レクリエーションの一環として、福岡県下の高等学校の体育祭や運動会の実態を明らかにした。また、いくつかの問題点が浮きぼりにされた。なかでも、企画、運営、指導が一番問題

となっている。

体育祭や運動会の企画を考える場合、まず第一に基本の方針の確立、目標の設定である。日常の体育学習の成果の発表を中核とするのか、教師や生徒、父兄を含めて健康で、明るくなごやかな人間関係づくりに貢献させるのか、また、地域社会の理解と協力をねらうのか、などの方針を明らかにすることである。それにもとづいて指導計画を作成し、プログラムを企画すべきである。とくに、プログラムが形式化、固定化、マンネリ化の傾向があるときは、アイデアを生かした新鮮さのある種目を考えるべきである。体育祭や運動会は学校行事として、生徒全員参加が当然である。全員参加であれば運動技能の低い生徒や、運動欲求の弱い生徒が喜んで参加しやすいプログラムを考えなくてはならない。それには勝敗にこだわる競技的性格の種目より、それを行なうこと自体に楽しさを求めるレクリ

エーション的性格の種目を多くして欲しい。種目のみではない、開会や閉会の形式や昼休み時間の生かし方など、アイデアを生かしてレクリエーション的なつどいを計画してよい。それぞれの学校で独特の体育祭、名物的な運動会を企画することが大切である。企画の段階では、生徒の欲求やアイデアを必ず取りあげ、自らの、我々の体育祭や運動会であるという意識を強く持たせることである。運営についても、練習時間や準備時間を多くとらなくてすむように合理化を考えること、過去の経験を生かしながら、常に現代化をはかることを忘れてはならない。

最後に体育祭や運動会を企画、運営、指導する人たちにレクリエーション理論や技術をもっと学んでいただくことを要望する。

この研究は朝長裕介（福岡工業高等学校）との共同研究であることを付記する。

レク・リーダー研修会における教育効果に関する一考察

—とくにその態度の変化について—

東海大学 高橋 和 敏 大北 文 生
野間口 英 敏 川 向 妙 子
北里大学 鈴木 秀 雄

I 研究の目的

レクリエーションに限らず、一般に教育効果は、速効的ではない、長い目でみなければわからないといわれている。

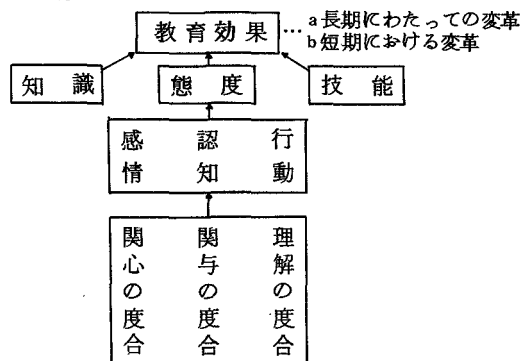
しかし、だからといって、放っておいてよいものでもない。何らかの手だてを用いて、効果を知る必要がある。

従来までは、チェックリスト、テスト、感想文評価用紙、反省会などの形で行なわれているのが多いようである。しかし、このような方法では、多分に他の要素が含まれるし、個人が、どの程度変わったかということの目安をつかむことは、困難である。

そこで、何らか、量化する方法で、知る必要があると考えた。

教育効果の評価観点としては、知識面、技能面、態度面などが考えられるが、本研究では、そのうち態度面を中心に、検討を試みようとしたものである。

II 論理の図式



II 研究の方法

①関心度、理解度、関与度をみるための問題設定をし、質問用紙を作成した。(調査用紙参照)

②問題は以下のように10問とした。

問2)～5) → 関心度

1), 6) → 関与度

7a)～7d) → 理解度

③解答を量化する方法として、各項、7段階尺度法を使用した。

④解答の評価は、7を最も積極的に好ましいと考えた。

⑤上記質問紙で、研修前と研修後の2回解答をしてもらった。

⑥整理の方法として、前後の比較検討を以下の三点で行なった。

<A> 男女別年齢別の平均得点による比較

 男女別勤続年数による比較

<C> 個人の変化度の検討

但し、質問1)は、研修前のみであるので比較を行なわなかった。

⑦対象者は、H労働組合青年婦人部主催のレクリエーションリーダー養成研修会参加者341名である。

この中で、K地区研修会参加者、男子25名、女子24名、計49名についての結果を今回は、報告する。

⑧測定の期日は、1973年11月22日～1974年1月27日である。

調査用紙

1. あなたは、今までに組合のレクリエーション行事に、どの程度参加してきたと思いますか。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

参加しない ←————→ 参加する

2. 新聞や雑誌に、レクリエーションの記事がのっていたら、あなたはどの程度注意して読みますか。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

読まない ←————→ 読む

3. あなたは、レクリエーションに関して、500円以下の本を本屋でみかけたら、どの程度買いたいと思いますか。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

買わない ←————→ 買う

4. あなたが、同僚から組合のレクリエーション行事について尋ねられたら、どの程度すずんで説明しますか。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

説明しない ←————→ 説明する

5. あなたが友人との先約があったとき、たまたまレク・リーダーの会合が重なったとしたら、どの程度その会合に出席しますか。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

出席しない ←————→ 出席する

6. あなたは、組合のレク活動にとって、どの程度大切な人物だとあなた自身思いますか。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

大切ではない ←————→ 大切だ

7. 次のような意見に、あなたはどの程度賛成しますか。

7 a. レクリエーションは遊びであり、個人が好きなきに、好きなことをやればよいのだから、組合では、とくに考える必要はない。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

反対 ←————→ 賛成

7 b. レクリエーションは、現代人にとってかせないものであるから、組合はもちろん、すべての人がやらなければならない。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

反対 ←————→ 賛成

7 c. レクリエーションは余暇に楽しむことだから、余暇のないものにとっては、どうしようもない。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

反対 ←————→ 賛成

7 d. レクリエーションは、たとえお金や暇が少なくとも、創意工夫によって楽しむことができる。

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

反対 ←————→ 賛成

Ⅳ 結果および考察

目の平均点を、研修前（Ⅰ回目）、研修後（Ⅱ回目）について、整理したものである。

< A > 男女年令別にみた、各項目の得点

男子についてみると、質問 1) ～ 6) に

表 1、表 2 は、男女年令別にみた、各項目

表 1 年令別にみた各項目得点（男）

項 目	年 令	18才	20才	22才	24才	全体
		19才	21才	23才	25才	
2. 新聞や雑誌に、レクリエーションの記事がのっていたら、あなたはどの程度注意してみますか。	Ⅰ	2.5	3.7	3.5	4.8	3.68
	Ⅱ	3.0	4.3	3.6	4.5	3.88
3. あなたは、レクリエーションに関して、500円以下の本を本屋でみかけたら、どの程度買いたいと思いますか。	Ⅰ	2.5	3.4	2.5	3.0	2.84
	Ⅱ	3.0	3.4	2.4	3.3	2.88
4. あなたが、同僚から組合のレクリエーション行事について尋ねられたら、どの程度すすんで説明しますか。	Ⅰ	4.5	4.9	4.8	5.5	4.92
	Ⅱ	3.0	5.3	4.3	6.0	4.76
5. あなたが友人との先約があったとき、たまたまレク・リーダーの会合が重なったとしたらどの程度その会合に出席しますか。	Ⅰ	3.5	4.7	4.3	4.5	4.36
	Ⅱ	3.5	5.3	4.3	4.0	4.44
6. あなたは、組合のレク活動にとって、どの程度大切な人物だとあなた自身思いますか。	Ⅰ	2.0	4.4	4.4	4.3	4.20
	Ⅱ	2.5	4.7	4.2	5.0	4.32
7 a. レクリエーションは遊びであり、個人が好きなきに、好きなきをやればよいのだから、組合では、とくに考える必要はない。	Ⅰ	6.5	5.7	5.9	5.8	5.88
	Ⅱ	6.5	5.9	5.8	6.8	6.00
7 b. レクリエーションは、現代人にとってかせないものであるから、組合はもちろん、すべての人がやらなければならない。	Ⅰ	6.0	5.6	5.3	6.3	5.56
	Ⅱ	4.5	5.6	5.3	6.3	5.44
7 c. レクリエーションは余暇に楽しむことだから、余暇のないものにとっては、どうしようもない。	Ⅰ	6.5	5.9	5.7	6.3	5.88
	Ⅱ	6.5	5.6	5.9	5.5	5.80
7 d. レクリエーションは、たとえお金や暇が少なくとも、創意工夫によって楽しむことができる。	Ⅰ	7.0	6.6	6.5	6.8	6.60
	Ⅱ	6.5	6.9	6.0	6.8	6.40
1. あなたは、今までに組合のレクリエーション行事に、どの程度参加してきたと思いますか。	Ⅰ	2.5	4.9	3.9	6.0	4.40

ついては、年齢が高くなるにつれて、やや高い得点を示し7a)~7d)では、逆になっている傾向を示している。全体的には、1)

~6)に低い点がみられ、7a)~7d)は高い点を示している。

すなわち、関心度および、関与度は普通

表2 年齢別にみた各項目得点(女)

項 目	年 令	18才	20才	22才	全体
		19才	21才	23才	
2. 新聞や雑誌に、レクリエーションの記事がのっていたら、あなたはどの程度注意して読みますか。	I	3.9	3.5	3.0	3.63
	II	4.3	4.0	4.0	4.13
3. あなたは、レクリエーションに関して、500円以下の本を本屋でみかけたら、どの程度買いたいと思いますか。	I	3.2	3.6	2.5	3.33
	II	3.9	4.4	2.3	3.92
4. あなたが、同僚から組合のレクリエーション行事について尋ねられたら、どの程度すすんで説明しますか。	I	4.4	4.9	3.0	4.54
	II	4.4	4.7	3.7	4.46
5. あなたが友人との先約があったとき、たまたまレク・リーダーの会合が重なったとしたら、どの程度その会合に出席しますか。	I	4.6	4.7	1.0	4.38
	II	4.8	4.7	2.3	4.46
6. あなたは、組合のレク活動にとって、どの程度大切な人物だとあなた自身思いますか。	I	3.5	4.6	2.5	4.00
	II	3.5	5.3	3.0	4.25
7 a. レクリエーションは遊びであり、個人が好きなきに、好きなことをやればよいのだから、組合では、とくに考える必要はない。	I	6.3	6.2	4.5	6.08
	II	5.9	5.9	5.3	5.83
7 b. レクリエーションは、現代人にとってかせないものであるから、組合はもちろん、すべての人がやらなければならない。	I	5.4	5.6	4.5	5.42
	II	5.3	5.5	3.7	5.21
7 c. レクリエーションは余暇に楽しむことだから、余暇のないものにとっては、どうしようもない。	I	6.0	6.3	4.5	6.04
	II	6.0	5.9	5.3	5.88
7 d. レクリエーションは、たとえお金や暇が少なくとも、創意工夫によって楽しむことができる。	I	6.4	6.6	6.0	6.46
	II	6.4	6.1	6.0	6.21
1. あなたは、今までに組合のレクリエーション行事に、どの程度参加してきたと思いますか。	I	3.1	4.0	3.5	3.58

くらいであり、理解度については、より好ましい考え方をしていると解釈できるようだ。

一方、女子についてみると、男子の逆で年齢が低くなるに従い高い得点である。しかし、項目別の得点では、男子同様、1)

～6)が低く7a)～7d)が高い結果であった。研修前(I)と研修後(II)の得点を比較してみると、男、女、年齢別ともに、ほとんど大きな差はみることができなかった。

表3 全体の各項目得点

項 目	前 後	
	I 回 目	II 回 目
2. 新聞や雑誌に、レクリエーションの記事がのっていたら、あなたはどの程度注意して読みますか。	3.66	4.00
3. あなたは、レクリエーションに関して、500円以下の本を本屋でみかけたら、どの程度買いたいと思いますか。	3.08	3.39
4. あなたが、同僚から組合のレクリエーション行事について尋ねられたら、どの程度すすんで説明しますか。	4.73	4.61
5. あなたが友人との先約があったとき、たまたまレク・リーダーの会合が重なったとしたら、どの程度その会合に出席しますか。	4.37	4.45
6. あなたは、組合のレク活動にとって、どの程度大切な人物だとあなた自身思いますか。	4.10	4.29
7 a. レクリエーションは遊びであり、個人が好きなときに、好きなことをやればよいのだから、組合では、とくに考える必要はない。	5.98	5.92
7 b. レクリエーションは、現代人にとってかせないものであるから、組合はもちろん、すべての人がやらなければならない。	5.49	5.33
7 c. レクリエーションは余暇に楽しむことだから、余暇のないものにとっては、どうしようもない。	5.96	5.84
7 d. レクリエーションは、たとえお金や暇が少なくとも、創意工夫によって楽しむことができる。	6.53	6.51

 勤続年数別にみた各項目の得点

表3に示したものが男女勤続年数別に示した各質問項目での解答点の平均値である。

なお、女子は、2年、4年には該当者がいなかった。

男子についてみると、質問2)～6)では勤続年数の長い方が、高い値を示し、7a)

～7d)では、短い方が高くなっている。女子の方は、全項目について、勤続年数の短い方が、高い値を示している。

なお、研修前後を比較してみると、年齢別と同じく、明らかな、差をみる事が、できなかった。

表4 勤続年数別にみた各項目得点

項 目	勤 務 年 数					
		1年未満	2年	3年	4年	5年以上
2. 新聞や雑誌に、レクリエーションの記事がのっていたら、あなたはどの程度注意して読みますか。	男	1.0	7.0	3.2	3.9	3.8
	女	3.8		3.8		2.8
3. あなたは、レクリエーションに関して、500円以下の本を本屋でみかけたら、どの程度買いたいと思いますか。	男	1.0	7.0	2.5	2.8	2.9
	女	3.0		4.1		2.3
4. あなたが、同僚から組合のレクリエーション行事について尋ねられたら、どの程度すすんで説明しますか。	男	4.0	7.0	4.3	4.9	5.2
	女	4.6		4.7		5.5
5. あなたが友人との先約があったとき、たまたまレク・リーダーの会合が重なったとしたら、どの程度その会合に出席しますか。	男	1.0	4.0	4.5	4.9	4.1
	女	4.7		4.7		3.0
6. あなたは、組合のレク活動にとって、どの程度大切な人物だとあなた自身思いますか。	男	2.0	1.0	4.3	4.1	4.7
	女	3.7		4.3		4.0
7 a. レクリエーションは遊びであり、個人が好きなときに、好きなことをやればよいのだから、組合では、とくに考える必要はない。	男	7.0	4.0	5.7	6.0	6.1
	女	6.1		6.0		5.0
7 b. レクリエーションは、現代人にとってかせないものであるから、組合はもちろん、すべての人がやらなければならない。	男	7.0	4.0	6.3	4.8	5.7
	女	5.2		5.7		5.3
7 c. レクリエーションは余暇に楽しむことだから、余暇のないものにとっては、どうしようもない。	男	7.0	7.0	5.8	5.4	6.0
	女	6.1		6.4		4.0
7 d. レクリエーションは、たとえお金や暇が少なくとも、創意工夫によって楽しむことができる。	男	7.0	7.0	6.5	6.1	6.8
	女	6.4		6.8		5.8

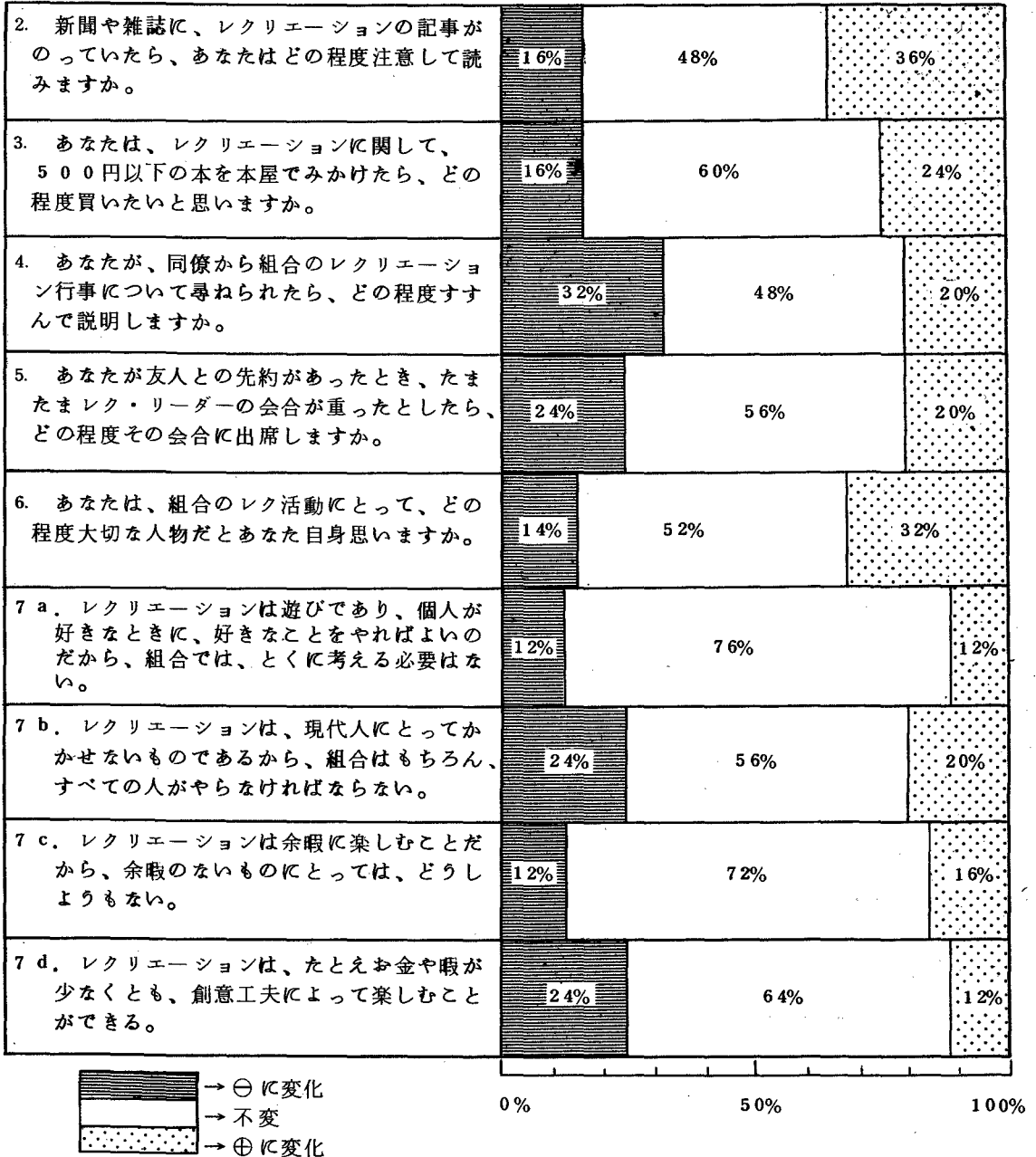
<C> 個人の変化度の結果

変化度は、研修前に行なった時、2)の質問に[4]と答えた人が、研修後に行なった時には、例えば[5]にかわっていたとしたら「プラス1度」とし、逆に[3]であったら

「マイナス1度」、前後かわってない人は、「不変」というようなかたちで、整理したわけである。図1は、男子のもの、図2は、女子、図3は、全体のものである。

その結果、図に示されるごとく全体的には各

図-1 変化度 (男)



項目とも、「不変」が50パーセント以上である。しかし、個々の項目についてみると、プラスマイナスに変化が大きいものがあった。

図1の男子では、2)の項目で、プラスに36パーセント 6)の32パーセント

4)でマイナスに32パーセント。

図2の女子は、項目2),3)で40パーセント以上プラスに変化という大きい値を示している。

図-2 変化度 (女)

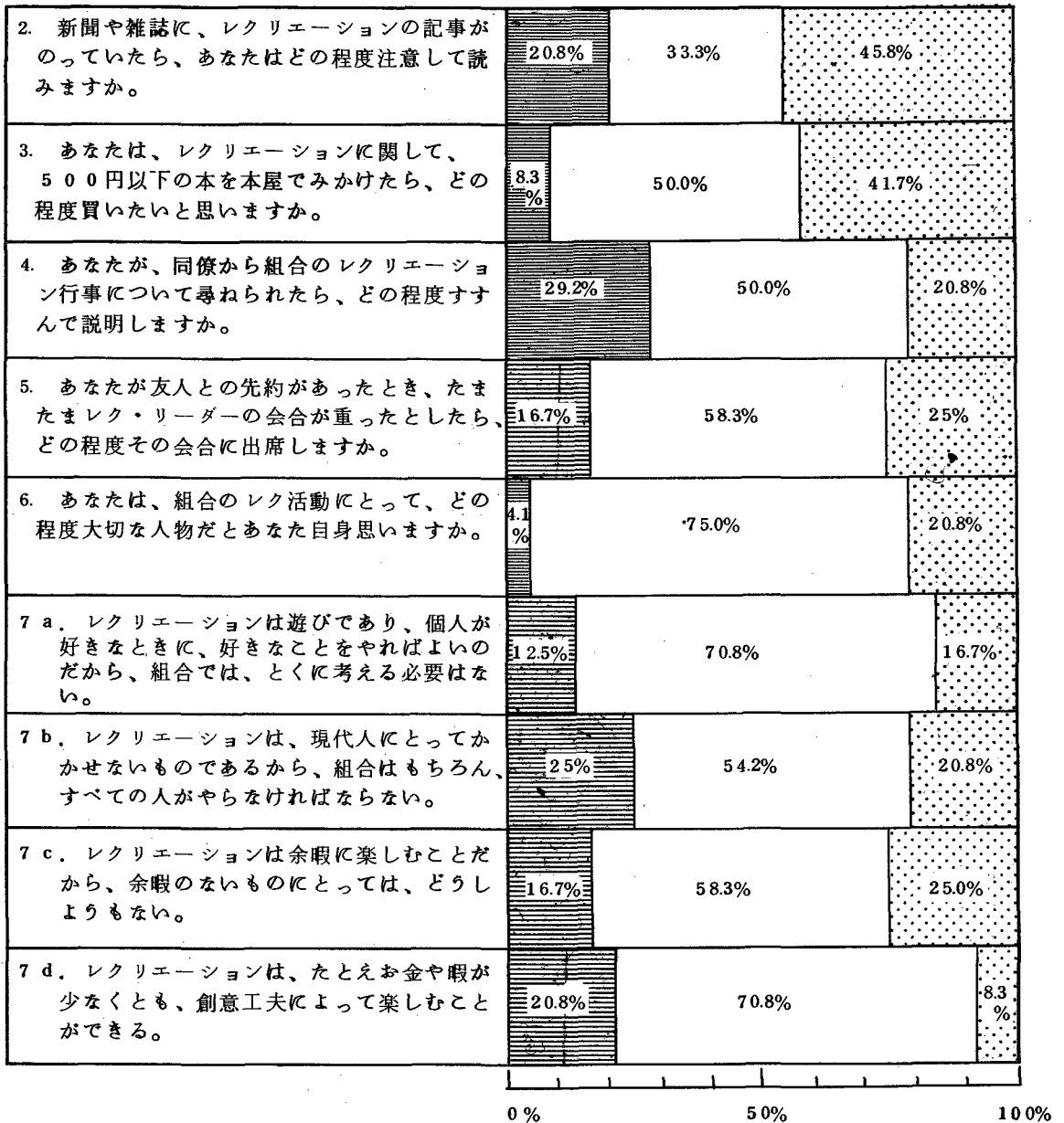
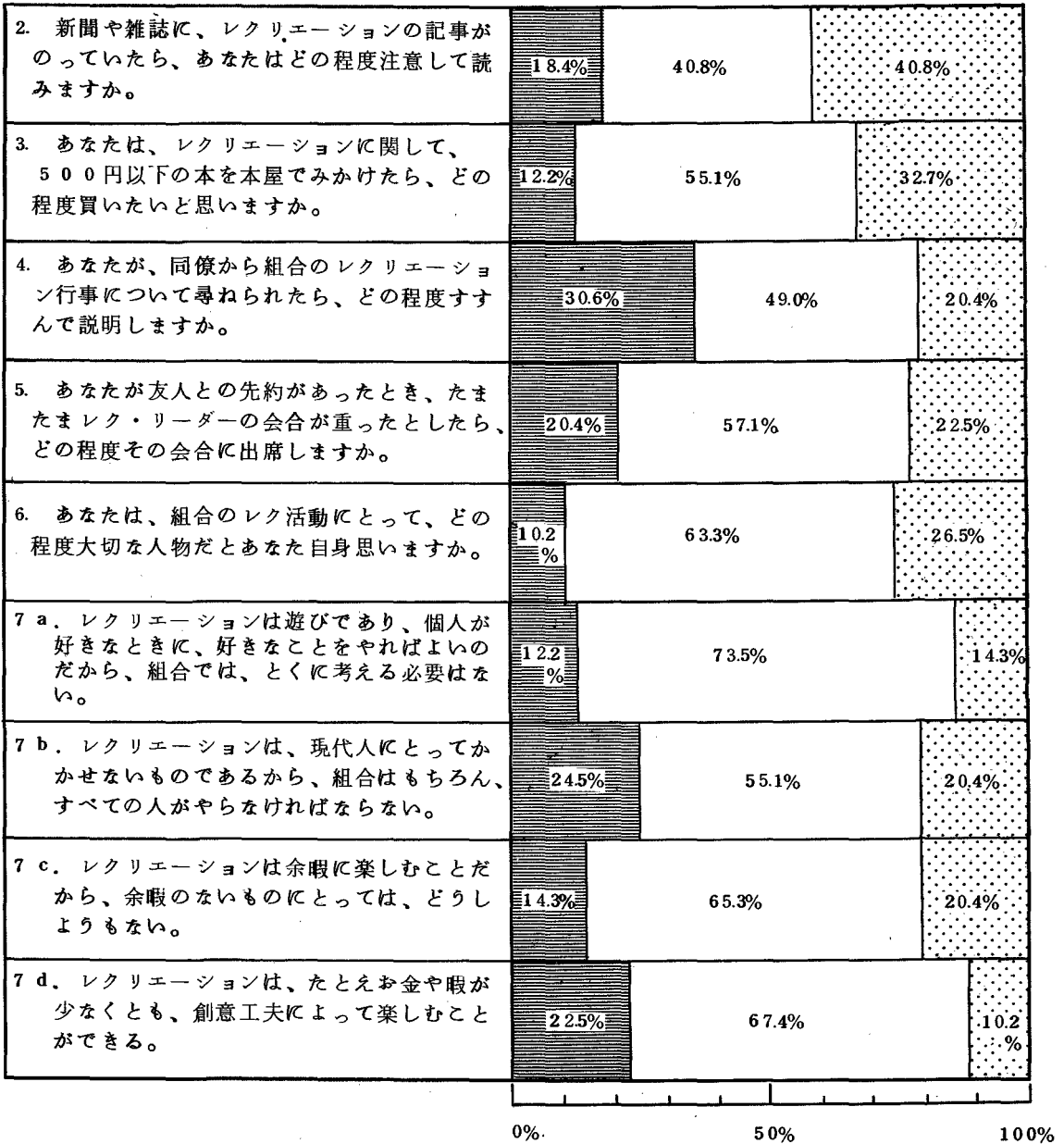


図-3 変化度 (全体)



V ま と め

今回、レクリエーションの研修会での教育効果をみるひとつの手だてとして、態度の変化度合に着目し、関心度、関与度、理解度について、独自の質問項目を設定し、それに対する解答を7段階尺度法を用いて、量化する試みを行なったわけであるが、短期（1泊2日）の研修会、会社の組合の研修会であるなどの条件から考えあわせると、期待したほどの結果を得ることができなかったようである。

しかし、今回の資料からも、個人の変化度合

を整理した結果では、関心の項目に、全体の半数近くが、変化をあらわしている。

すなわち、今後レクリエーションに、かかわりを持つとする気持で、より強くなっているということもできる。

なお、今回は、K地区のみの結果であるので分析を残している他の地区および全体をまとめて多くのデータで、検討をしたい。

又、質問項目、内容などに、多くの研究課題があるので、今後、引続き、関連研究をすすめて行きたい。

生活時間からみた主婦の余暇行動の分析

—性格、体格による相違について—

大阪体育大学 池田 勝、江藤 明 美

<はじめに>

余暇活動に及ぼす要因としてデモグラフィック特性(性、年齢、ライフステージ等)、社会経済的特性(職業、教育、所得、社会的地位等)、余暇時間(平日、休日の余暇パターン等)、心理的特性(生活態度、性格等)、空間的特性(都市的・村的、家の大きさ等)、モビリティ特性(自動車の所有)などが挙げられこれまでこれらの要因を独立変数として余暇に関する調査研究が多くなされてきているが、体格、性格といった面から余暇行動を分析することは少なかった。そこで今回は、“主婦の持つ性格特性(外向型、内向型)、体格(肥満型、ヤセ型)によって余暇行動に違いがみられるのではないか”という仮定のもとに本研究を進めた。

<方法>

大阪附近一帯に在住する職業婦人でないサラリーマン家庭の主婦80人を対象に、面接調査によって以下に述べる3つの調査表に回答を求めたものである。

性格特性を外向型と内向型2つに分類するために「矢田部・ギルフォード性格検査」、主婦の一日の生活を明確にするために「生活時間調査表」「内職、パートタイムの有無、余暇時間数1か月平均の余暇活動、余暇意識に関する質問調査表」を配布し、面接調査を実施した。

「矢田部・ギルフォード性格検査」によって測定される性格特性は12あり、それらは、①情緒不安定因子(抑鬱性、回帰性傾向、劣等感、

神経質)②社会不適応因子(客観性欠如、協調性欠如、愛想の悪いこと)③活動性因子(愛想の悪いこと、一般的活動性)④衝動性因子(一般的活動性、のんきさ)⑤非内省性因子(のんきさ、思考的外向)⑥主導性因子(支配性、社会的外向)の6つのグループ(因子)に分類できるが、大きくは、①情緒安定性 ②社会適応性 ③④⑤⑥のうちの3グループである。①②の尺度が高次の情緒性、③～⑥が高次の外向性・内向性の諸尺度であるから、これらの組み合わせで、A型、B型、C型、D型、E型の典型が考えられる。

①②③のうち、本研究では外向と内向の区別をするために③④⑤の因子(一般的活動性、のんきさ、思考的外向、支配性、社会的外向)を用いて、外向型(B型、D型)・内向型(C型、E型)に分類した。平均型(A型)はここでは除外した。したがって実際の対象数は67人である。

「生活時間調査表」は10分ごとに1次の行動、2次の行動(並行して行った行動)を記入し、⑦場所又は移動、⑧一緒にいた人、⑨満足度についてはそれぞれの分類表(⑦については1.自宅、2.近隣、親類、知人、友人などの家およびその周辺の街頭等2項目、⑧については、1.一人きり、2.公けの場で一人、3.配偶者と一緒、子供は別等9項目、⑨については、1.非常に楽しかった～5.不快だった、までの5段階)によって番号を記入するようになっている。

「余暇行動質問調査表」は、内職・パートタイムの有無と時間数、余暇時間数を記入、1か

月平均の余暇活動については、映画、音楽会、美術展、ショッピング、スポーツ、ボウリング等13の活動をあげ、それぞれ回数を記入、余暇意識については、身体や心を休める、日常生活から離れて気分転換する等10項目をあげ選択記入するようになっている。

＜結果及び結果の考察＞

性格特性をY-G検査によって大きく外向型と内向型の2つに分類した。それぞれの性格の特徴は次のようになる。図1はY-G検査のプロフィールであるが、実線は外向型、破線は内向型である。情緒の安定、社会的適応に関して両者に違いはみられないが、外向型は、攻撃的、活動的、のんき、支配性大社会的外向といった因子が大きく、総体的にみて、活動的、衝動的、内省的でない、主導権を握る傾向がある。逆に内向型は非活動的非衝動的、内省的、非主導的と言うことができる。

体格についてはローレル指数⁽¹⁾を求め、ローレル指数160以上を肥満型、100以下をヤセ型とした。肥満型とヤセ型のY-G検査のプロフィールは図2であるが、実線は肥満型、破線は内向型である。肥満型はヤセ型に比べて非活動的となっているが、これは太っている為に身体を動かすことが不得手となり、それが次第に非活動的にさせたものと考えられる。今回はサンプル数が少なかったので今後の参考としてまとめておく。

[1] 平日の生活時間について(表1.図3参照)

(1) 睡眠時間：外向型7時間45分、内向型7時間41分。肥満型7時間40分、ヤセ型7時間42分。外向型-内向型、肥満型-ヤセ型ともほぼ同じ睡眠時間である。

(2) 家事従事時間：外向型5時間31分、内

向型5時間19分である。この家事には、掃除洗濯、炊事はもちろん、主人の世話、子供の世話(一緒に遊ぶを含む)を含んでいる。ここでも両者に差はない。

肥満型4時間32分、ヤセ型5時間37分という結果でヤセ型の方が1時間程家事に従事する時間が長くなっている。

(3) 生活必需時間：睡眠時間は独立させたのでここでは身の廻りのことをさす。

外向型2時間41分、内向型2時間52分とほぼ同じ時間である。

肥満型2時間43分、ヤセ型2時間42分とほとんど同じ時間である。

(4) 自由時間：自由時間の中で内職の占める時間が半分に近いためここでは余暇時間と内職時間に分けることにした。

(i) 余暇時間：外向型4時間36分、内向型4時間16分、外向型がわずかに20分多くなっている。

肥満型4時間21分、ヤセ型4時間34分ヤセ型がわずかに13分だけ余暇に費している時間が多い。

(ii) 内職時間：自由時間のほぼ半分を占めるもので大部分の主婦が、趣味と実益を兼ねた余暇の一つとして行動している。いわゆる昔の生活のための必然のものといった暗いイメージではなく、余暇を有意義に使うための一石二鳥のものとして考えられている傾向がみられる。

外向型3時間20分、内向型3時間53分と内向型が約30分多くなっている。

肥満型4時間43分、ヤセ型3時間24分と肥満型が1時間ほど多く内職に費している。これは(2)家事従事時間とも関係し、肥満型は家事に従事する時間を短縮し、その分を内職に注いでいると考えてよいと思う。

(5) ながら行動について：洗濯機、掃除機、

(1)ローレル指数(R1) $\frac{\text{体重}}{\text{身長}^3} \times 10^5$

炊飯器といった電気製品の普及により主婦の家事時間はかなり短縮されたが、それによって洗濯機をかけながら掃除をする、又テレビの普及によって、テレビを視ながら、あるいはラジオを聞きながら、食事の用意をする、食事をする、編物をする、といった二重行動が多くみられるようになった。いわゆる“ながら族”が主婦の間にも広がりつつあるとあって良いと思う。外向型2時間33分、内向型3時間2分のながら時間があり、内向型の方が30分ほど多くなっている。

肥満型3時間55分、ヤセ型3時間51分ではほぼ同じである。

以上、生活時間を比べてみたが、外向型-内向型、肥満型-ヤセ型について家事従事時間に関しヤセ型の方が肥満型より1時間長くなっていた以外ほとんどその相違はみられなかった。

〔II〕 平日の生活時間の中で占める余暇

利用について(表2.図4参照)

ここでは、余暇を自由時間での活動というだけでなく、“ながら行動での余暇”も含めて捕えた。

外向型の活動は、①テレビの視聴 ②雑誌の購読 ③編物 ④ラジオの聴取 ⑤和裁、洋裁 ⑥新聞の購読 ⑦休息の順に多く、内向型では①テレビの視聴 ②和裁、洋裁 ③ラジオの聴取 ④雑談 ⑤休息 ⑥編物 ⑦観劇となっている。余暇として一番多く費されているのがテレビの視聴で、外向型(3時間50分)内向型(3時間47分)ともその大部分を占め、主婦にとってテレビは生活の中で切り離すことのできないものの一つになっているようである。読書、編物とも外向型、内向型の差はほとんどないが、ラジオの聴取になると外向型18分、内向型50分と内向型が約3倍ほど多くなっている。新聞の購読時間は、ごく短時間で内向型は

わずか6分、外向型も内向型の2倍であるが、12分と低くなっている。新聞を実際に読んでいる人は、今回の調査では外向型36%、内向型15%であった。このことから、ほとんどの主婦が新聞を読んでいないということがわかる。これは、主婦がゆっくり落ち着いて新聞に目を通す時間を持ってない、あるいは持とうとしないこととともに、ほとんどの情報(ニュース、料理、ショッピング、育児その他家庭生活に関する知識、健康等)がテレビから吸収できるということにあると考えられる。新聞を読むためには、独自の時間が必要となるが、テレビでは洗濯をしながら掃除をしながらといったように家事に従事しながら目や耳を向ければそれで済むからである。新聞に代わるものをテレビでどの程度吸収しているかを調べてみると(視聴番組の調査)もっとはっきりするであろう。雑誌に関しては、外向型が33分を費しているが、内向型は0分という結果であった。これは、外向型が、社会的外向の性格の故に、テレビやラジオの情報だけで満足できず、他からも広く情報や知識を得ようとしていることを示していると思われる。雑談については、外向型は3分であるのに内向型は36分を費している。外向型は、木彫、日舞、ボウリング、整美体操、トレーニングといった活動を行っているが、内向型ではわずかに押絵と観劇といった活動だけであった。やはりこれは、Y-G検査の比較からわかるように、外向型が内向型より活動的であるためであろう(図1参照)。

次に肥満型とヤセ型をみると、肥満型の活動は①テレビの視聴 ②ラジオの聴取 ③編物 ④休息 ⑤ショッピング ⑥雑談 ⑦押絵 ⑧読書 ⑨新聞の購読 ⑩リボンフラワーの順に多く、ヤセ型では①テレビの視聴 ②ラジオの聴取 ③和裁、洋裁 ④休息 ⑤雑談 ⑥編物 ⑦新聞の購読となっている。肥満型では太って

いるが為にその活動も身体を動かすことの少ないものが選ばれていると考えたが、ショッピングを楽しんだり、休息时间もヤセ型より少なかったりという結果が出ている。これは肥満型であっても外向型であるか内向型であるかによって違って来るので、今後は肥満-外向型、肥満-内向型、ヤセ-外向型、ヤセ-内向型と分けることも必要である。

【Ⅱ】 1か月平均の余暇活動について

1か月の平均余暇活動についての調査をまとめてみると(表3、図5からわかるように)全体に活動を行っている回数は少ない。

外向型では①ショッピングを毎月行っている人が97.9%と大部分を占めているが、その平均回数は3回 ②訪問66%1.4回 ③読書51.1%3.1回 ④ドライブ36.2%1回 ⑤会合34%0.9回 ⑥料理、編物34%3.7回 ⑦スポーツ23.4%1.2回 ⑧ボウリング17%0.23回 ⑨演劇、寄席12.8%0.15回 ⑩ピクニック12.8%0.15回 ⑪音楽、美術6.4%0.06回、スポーツ観賞6.4%0.06回となり、内向型では①ショッピング75%1.5回 ②読書50%4.5回 ③訪問50%1.55回 ④編物、料理35%3.1回 ⑤演劇、寄席20%0.2回 ⑥会合20%1.75回 ⑦ドライブ20%0.3回 ⑧ボウリング15%0.15回となっている。各活動を静的活動と動的活動に分類すると、静的活動は内向型の方が外向型より多く、動的活動は外向型の方が内向型より多くなっている。このことから外向型は活動的なものを好み、内向型は静的な活動を好む傾向があるということができると思われる。全体を一つの余暇活動とするとやはり外向型の方が内向型より多く活動していることになる。

肥満型では①全主婦がショッピングを毎月行っており、平均回数は3回 ②訪問73.3%

1.53回 ③読書33.3%1.2回 ④寄席、演劇26.7%0.33回、会合26.7%1回 ⑥ドライブ20%0.33回、ピクニック26.6%0.27回 ⑧料理編物13.3%3.33回 スポーツ13.3%0.73回 ⑩映画6.7%0.07回となっている。一方ヤセ型では ①ショッピング88.9%1.4回 ②料理、編物66.7%5回 ③訪問44.4%1回 ドライブ44.4%0.67回 ⑤ボウリング22.2%0.33回 ⑥音楽、美術11.1%0.11回 演劇、寄席11.1%0.11回 会合11.1%0.11回となっている。静的活動と動的活動をみると、静的活動においては、ヤセ型の方が肥満型より多く、逆に動的活動では肥満型の方がヤセ型より多く行なわれている。全体を一つの余暇活動とすると、やはりヤセ型の方が肥満型より多く活動を行なっているということがわかる。これはY-G検査のプロフィール(図2参照)からも明らかのように、ヤセ型が肥満型より活動的なために余暇活動を活発に行なっているからであると考えてよいと思う。ただし、ここで考えなければならないことは、前にも述べたように肥満型で外向型、肥満-内向型、ヤセ-外向型、ヤセ-内向型といった性格面と体格面との組み合わせり方によっても違いがみられると思われるのでこの両面から捕えていくことが必要になってくる。

【Ⅳ】 「余暇をどういう気持ちで過しているか」

外向型では①身体や心を休める ②日常生活から離れて気分転換する、③別に目的はないがそのこと自体を楽しむ。④家族とのつながりを深める、人との交際を広める、⑤順で余暇時間を過ごしており、内向型では①身体や心を休める。②別に目的はないがそのこと自体を楽しむ ③家族とのつながりを深める ④色々な知識や情報を得る ⑤日常生活から離れて気分転換する、

人との交際を広める、となっている。

肥満型では①身体や心を休める ②別に目的はないがそのこと自体を楽しむ ③人との交際を広める ④日常生活から離れて気分転換する、ヤセ型では①身体や心を休める ②別に目的はないがそのこと自体を楽しむ、③家族とのつながりを深めるの順に余暇時間を過ごしている。

意識の面でも外向型、内向型とも身体や心を休める、が最も多く、両者の間に差はみられない。肥満型、ヤセ型に於ても同様である。

余暇時間を身体や心を休めるという気持ちで過ごしている主婦が多いのは、余暇活動としてテレビの視聴が大部分を占めていることからみても明らかである。

〈まとめ〉

以上の結果からもわかるように本調査研究においては外向型と内向型との間に、余暇に関して明確な相違はみられなかった。しかし、この調査の結果から、外向型は動的な活動を、内向型は静的な活動を好む傾向がうかがえる。又、外向型は活動的である為に、テレビの視聴、ラジオの聴取、編物といったものの他に、じっと休息しているよりも木彫、日舞といったいわゆる趣味活動と、整備体操、トレーニング、ボーリングといった活動に余暇を費すという積極的な姿勢がうかがえる。

肥満型とヤセ型では、全体的にみると、ヤセ型の方が肥満型より多く活動を行っている。ここで注目されるのは、肥満型の方が身体的条件が不利であることから静的な活動が多く、逆にヤセ型が動的活動が多いであろうと予想されるが今回の結果では反対であった、ということである。

家庭製品の電化、便利化に伴い、主婦のながら行動が増え、積極的にながら行動をすることによってますます家事が合理化し、従事時間を

短縮できれば、それだけ主婦の自由時間が増える。その増えた自由時間を自分の余暇として有意義に過ごすことができれば、満足のいく充実した余暇生活が送れるのではないかと考える。しかし、現状をみると、努力して生み出した自由時間も、その使い方がわからない為、あるいは社会、経済的理由によって、内職、二次の家事（実益を兼ねた編物、裁縫等）に費し、いわゆる発展的な余暇（読書、新聞の購読、教養のための勉強、各種スポーツ、趣味活動、交際等）にとび込むということができていないように思われる。もちろん余暇の過し方は個人の選択にまかされるべきものであるが、「無駄にすごした」という悔いが残らない、目的をもった時間として充実させることができるためにも、これからは、主婦にとって取り組みやすい余暇活動（例えば、外向型の人には、ママさんバレー等の各種スポーツ教室、奉仕グループでの活動、内向型の人には一人で楽しむことのできる各種手芸教室、編物、料理教室といった各型にふさわしい活動）をまず提供し、それらの中から主婦が自分に合った活動を選択して、取り入れていくことが出来るような方向づけが必要であると思われる。それによって、生活を高めるために役立つ、あるいは人としての生甲斐を感じることで出来る時間としての余暇の充実がはかれるのではないかと考える。

本研究では、外向型・内向型、肥満型、ヤセ型と別個に分類したわけであるが、結果の考察の中でも述べたように、肥満型の中で、外向であるか内向であるか、ヤセ型の中で、外向であるか内向であるかということによって捕え方が異なってくる。今後はその両面考慮して研究を続けていくことが必要であろう。

図1 矢田部ギルフォード性格検査プロフィール

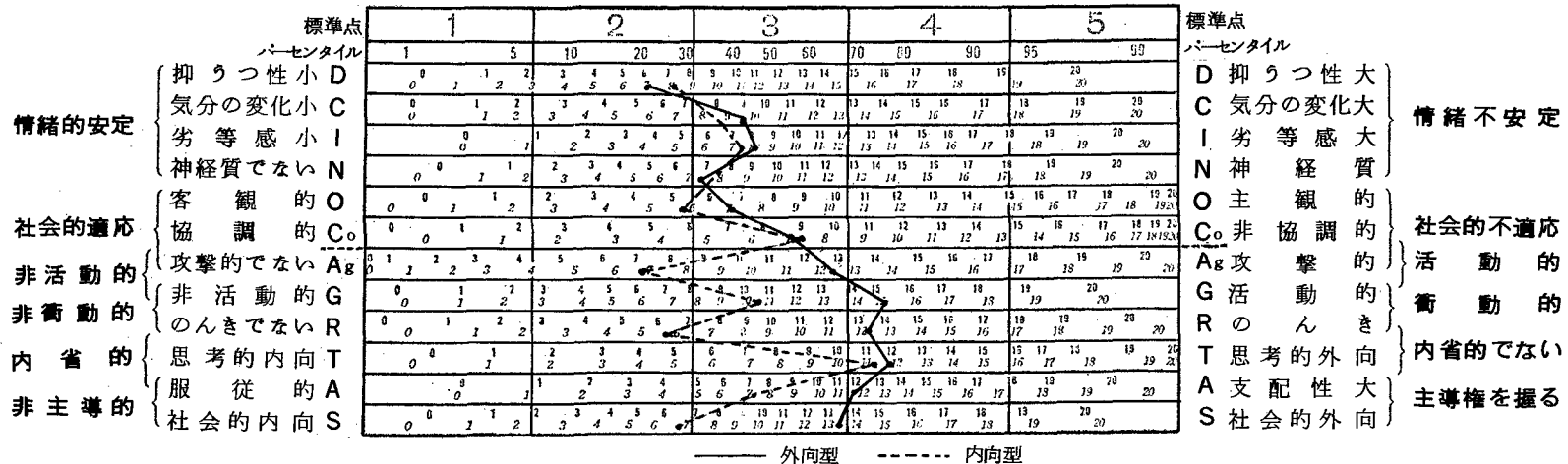


図2 矢田部ギルフォード性格検査プロフィール

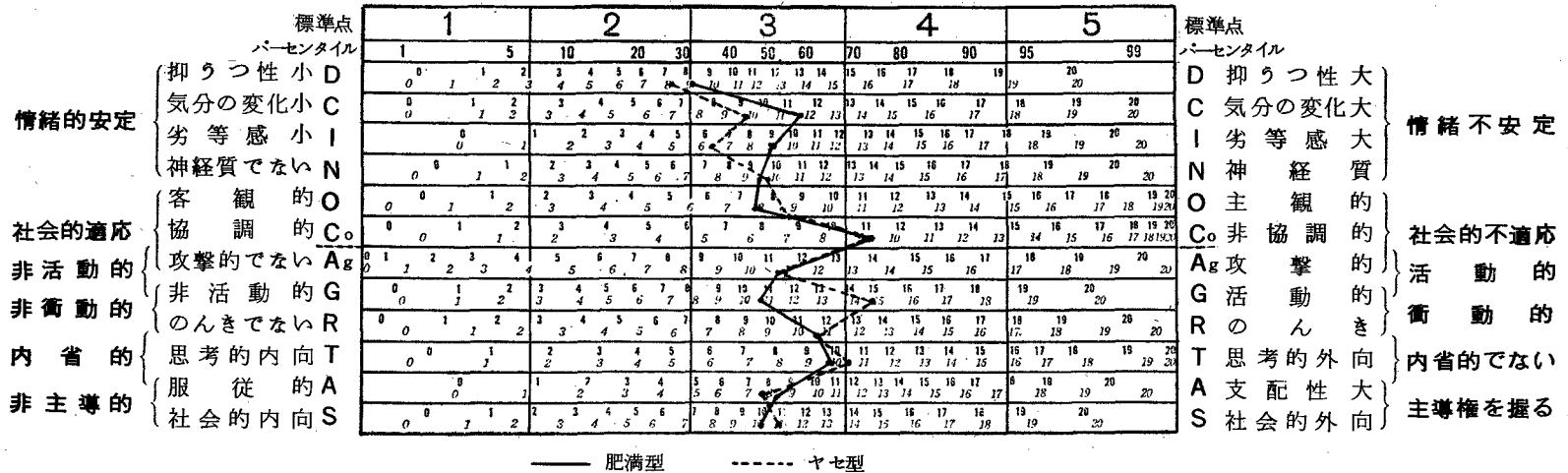


図3 平日の生活時間

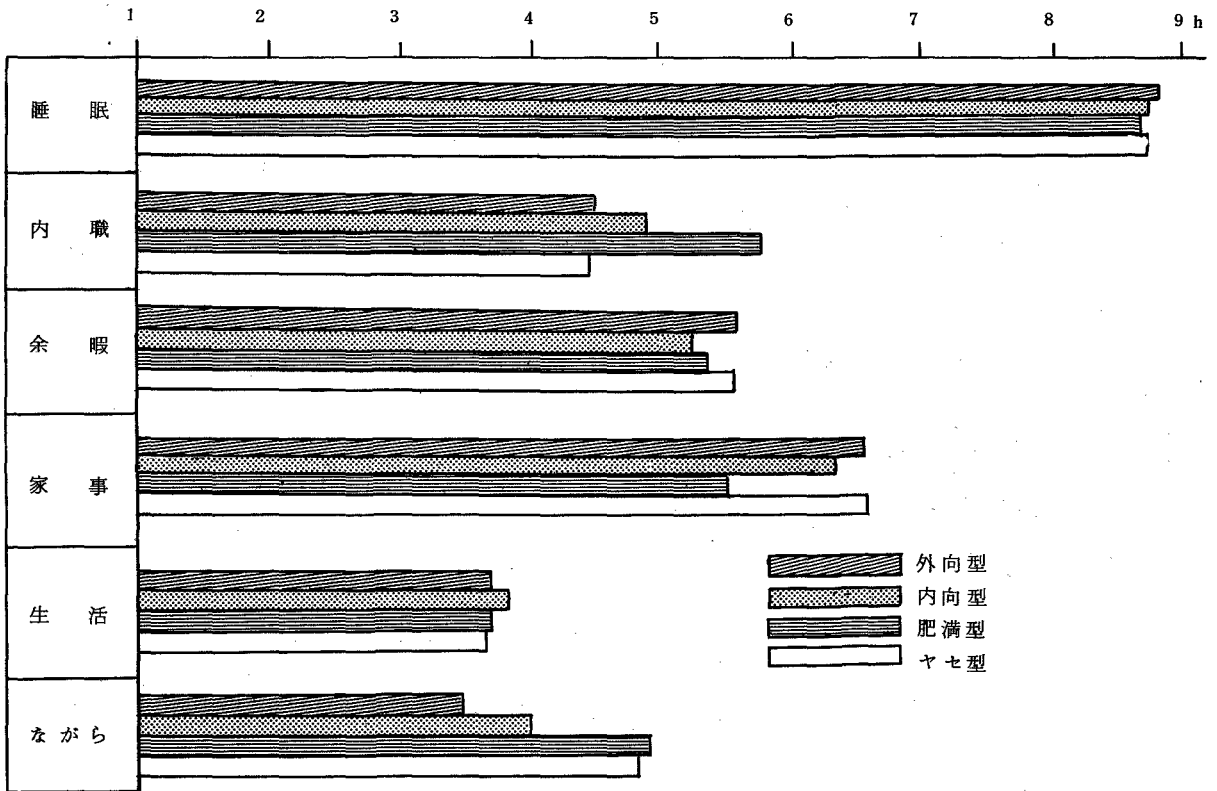


表1 平日の生活時間

	外向型	内向型	肥満型	ヤセ型
	47人	20人	15人	9人
睡眠時間	7時間45分	7時間41分	7時間40分	7時間42分
内職従事時間	3. 27	3. 53	4. 43	3. 24
余暇時間	4. 36	4. 16	4. 21	4. 34
家事従事時間	5. 31	5. 19	4. 32	5. 37
生活必需時間	2. 41	2. 52	2. 43	2. 42
ながら時間	2. 33	3. 02	3. 55	3. 51

図4 平日の生活時間からみた余暇の平均

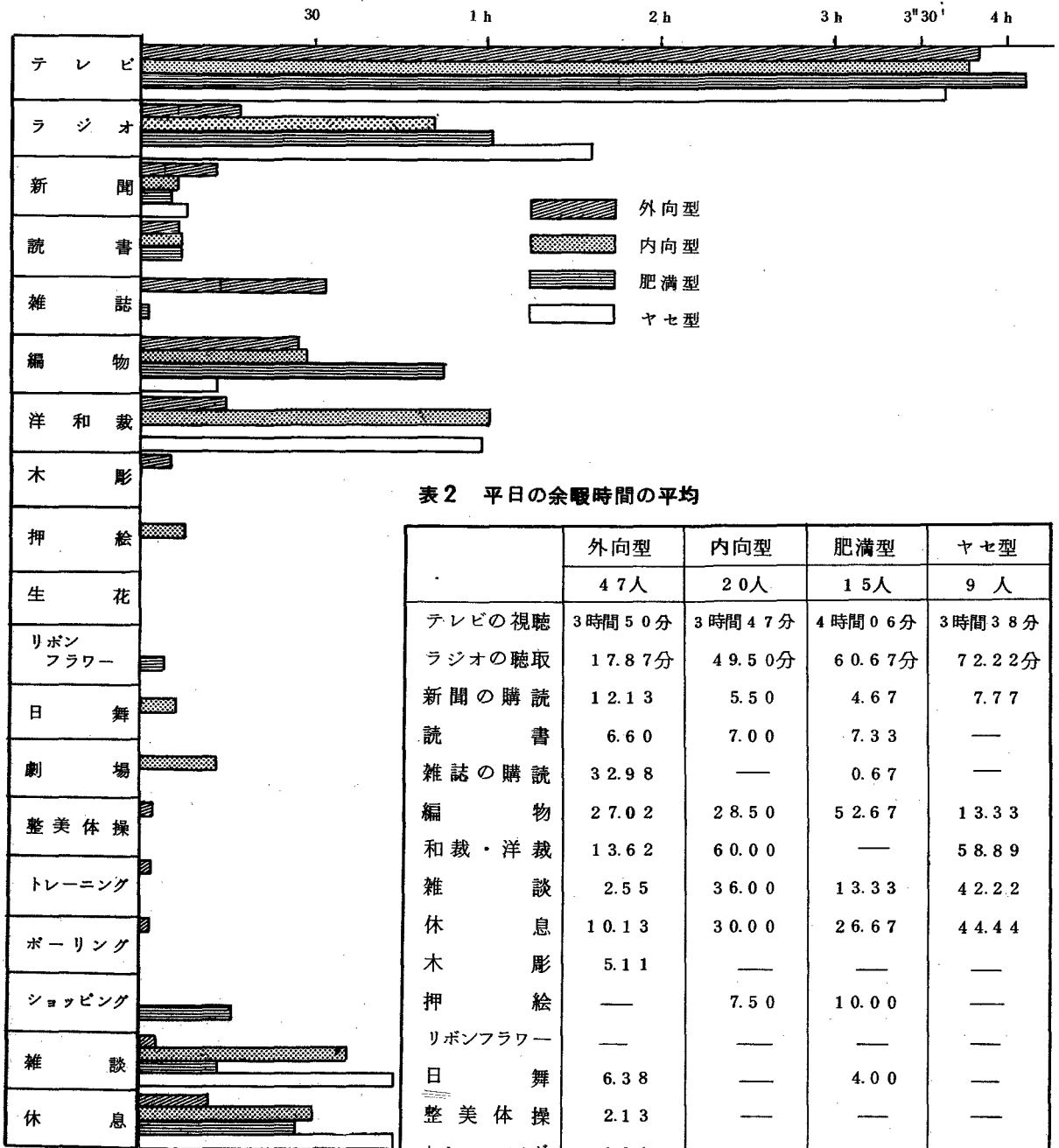


表2 平日の余暇時間の平均

	外向型	内向型	肥満型	ヤセ型
	47人	20人	15人	9人
テレビの視聴	3時間50分	3時間47分	4時間06分	3時間38分
ラジオの聴取	17.87分	49.50分	60.67分	72.22分
新聞の購読	12.13	5.50	4.67	7.77
読書	6.60	7.00	7.33	—
雑誌の購読	32.98	—	0.67	—
編物	27.02	28.50	52.67	13.33
和裁・洋裁	13.62	60.00	—	58.89
雑談	2.55	36.00	13.33	42.22
休息	10.13	30.00	26.67	44.44
木彫	5.11	—	—	—
押絵	—	7.50	10.00	—
リボンフラワー	—	—	—	—
日舞	6.38	—	4.00	—
整美体操	2.13	—	—	—
トレーニング	1.91	—	—	—
ボーリング	1.91	—	—	—
劇場	—	13.50	—	—
ショッピング	—	—	16.00	—

図5 1か月平均の余暇活動

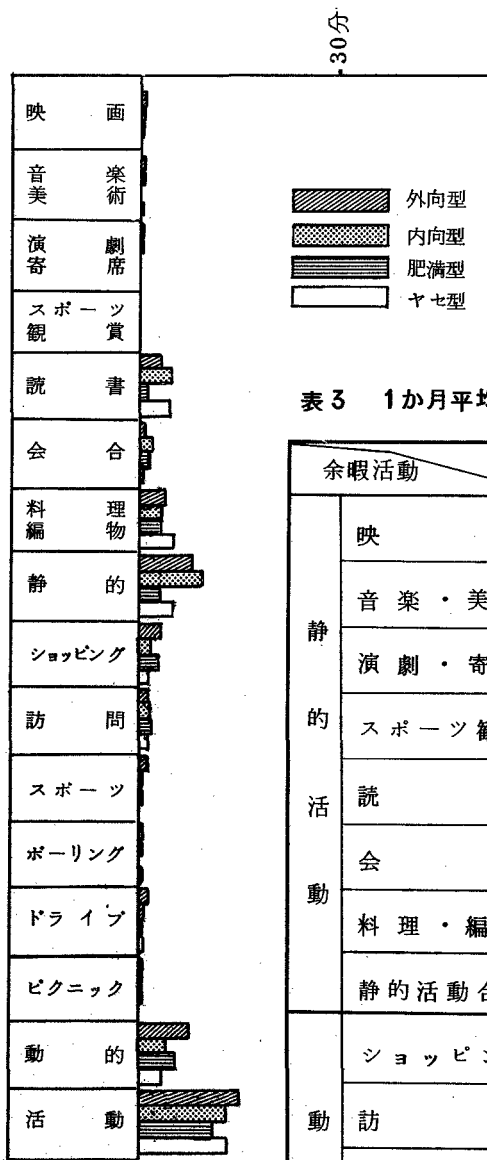


表3 1か月平均の余暇活動と各活動の実施者のパーセント

余暇活動		外向型	内向型	肥満型	ヤセ型
静的活動	映画	0.06回 6.4%	0.1回 10.0%	0.07回 6.7%	0回 -%
	音楽・美術	0.06 6.4	0.05 5.0	0	0.11
	演劇・寄席	0.15 12.8	0.2 20.0	0.33 6.7	0.11 11.0
	スポーツ観賞	0.06 6.4	0.05 5.0	0	0
	読書	3.12 51.1	4.5 50.0	1.20 33.3	4.56 33.3
	会合	0.89 34.0	1.75 20.0	1.0 26.7	0.11 11.1
	料理・編物	3.77 34.0	3.1 35.0	3.33 13.3	5.0 66.7
	静的活動合計	8.15	9.75	5.93	9.89
	動的活動	ショッピング	2.96 97.9	1.5 75.0	3.0 100.0
訪問		1.43 66.0	1.55 50.0	1.53 73.3	1.0 44.4
スポーツ		1.15 23.4	0.15 5.0	0.73 13.3	0
ボウリング		0.23 17.0	0.15 15.0	0	0.33 22.2
ドライブ		1.23 36.2	0.3 20.0	0.33 20.0	0.67 44.4
ピクニック		0.15 12.8	0.05 5.0	0.27 20.0	0
動的活動合計		7.15	3.7	5.87	3.44
余暇活動の合計		15.26	13.45	11.8	13.33

Journal
of
Leisure and Recreation Studies

Contents

- Case Study on the Physical Recreation in a Urbanizing
Local Community 43
Shinshiro Ebashi
Hirohide Nagayoshi (Tokyo University)
- A Study on Recreational Activity of High School 44
Yoshinori Akiyoshi
(Fukuoka University of Education)
- A Study on the Educational Effect in the Recreation Leader
Training Course 45
Kazutoshi Takahashi Humio Okita
Hidetoshi Nomagutchi Taeko Kawamukai
(Tokai University)
Hideo Suzuki (Kitazato University)
- Personality and Body Type Differences in the Leisure
Behavior of Housewives 47
Masaru Ikeda
Akemi Etoh
(Osaka College of Physical Education)
- Bibliography 48

CASE STUDY ON THE PHYSICAL RECREATION IN A URBANIZING LOCAL COMMUNITY

Shinshiro Ebashi and Hirohide Nagayoshi (University of Tokyo)

The purpose of this study is to find the changes of leisure time activities, especially physical recreation activities, in the process of urbanization.

Our point of view is to make it clear that there is a difference in leisure time activities between rural and urban area even in the rapidly changing city area.

Oyama city, Tochigi prefecture, was chosen as a typical city which is rapidly urbanizing city located 30 kilo-meters towards north from Tokyo metropolitan area.

Survey was made in 1964 and 1970.

Findings

1. Rural area residents lack the desire for physical recreation activities because of the traditional way of living. Therefore physical recreation activities are less prevailing in rural area than urban area in a community.
2. This lack of desire and the difference of physical recreation activities in rural area residents could not be influenced by the urbanization of this local community as a whole, from 1964 to 1970.
3. Therefore, the urbanization of this local community as a whole did not fulfilled the gap between urban and rural area in physical recreation activities.

A STUDY ON RECREATIONAL ACTIVITY OF HIGH SCHOOL

– State of affairs and problems of athletic meeting and physical education festival in high school of Fukuoka Prefecture –

Yoshinori Akiyoshi (Fukuoka University of Education)

State of affairs and problems of athletic meeting and physical education festival were investigated on object of 102 high schools of Fukuoka Prefecture. Results of this investigation were concluded as follows:

1. At 87 schools (85.3 %) athletic meeting and physical education festival were held every year.
2. At 82 schools (80.4 %) the season for these programs was September and October, and it's frequency at 66 schools (64.7 %) was once a year.
3. One half (at 44 schools 43.1 %) was held on week day, last half (at 42 schools 41.2 %) on week end.
4. Main objects of these programs at high school were social fitness through mass games.
5. For planning and management to hold these programs co-works with students and teachers.
6. One half of program contents was competition event, last half was recreational event.

A STUDY ON THE EDUCATIONAL EFFECT IN THE
RECREATION LEADER TRAINING COURSE

– Especially about the Changes of Attitude –

Kazutoshi Takahashi Humio Okita
Hidetoshi Nomagutchi Taeko Kawamukai (Tokai University)
Hideo Suzuki (Kitazato University)

This paper attempts to investigate the educational effect in the Recreation Leader Training Course as measured by the degree of changes of the attitude.

I set up questions as follows:

The degree of interest (Q2 ~ Q5)

The degree of participation (Q1 ~ Q6)

The degree of comprehension (Q7a ~ 7d)

- Q. 1. To what extent do you think you ever take part in the Recreation Event of your Labor Union?
- Q. 2. To what extent do you read with care about the articles on Recreation of papers and magazines?
- Q. 3. To what extent do you want to buy a book on Recreation of less than 500 yen?
- Q. 4. To what extent do you voluntarily explain the Recreation Events of Labor Union when you are asked it by fellow workers?
- Q. 5. To what extent do you attend the meeting when you have a appointment with your friend and the meeting falls on it?
- Q. 6. To what extent do you think you are an important man to the Recreation activities of Labor Union?

- Q.7. To what extent do you agree to the opinions as follows?
- Q.7a. It is not especially necessary for Labor Union to think of Recreation, because Recreation is a play and it is sufficient for people to do favorite things when they want to.
- Q.7b. Recreation is indispensable to the moderns and so everybody as well as Labor Union must do.
- Q.7c. Recreation is the play in the leisure time and so those who have leisure have no ways how to do.
- Q.7d. Recreation is, even if they have a little money and time, to be enjoyed by original ideas and devices.

The answers are scored by ways of seventh ranks measure.

The subject of this study existed among male and female recreation leaders who take part in the Recreation Leader Training Course. (for two days.)

The measurement test was given twice at the beginning and the end of the training course, and the answers were compared strictly.

The conclusions were that about 50% make a change in the item of the degree of interest and this training produces a good result, in the item of the degree of Participation and the degree of Comprehension a great change isn't observed.

PERSONALITY AND BODY TYPE DIFFERENCES IN THE LEISURE BEHAVIOR OF HOUSEWIVES

Masaru Ikeda and Akemi Etoh (Osaka College of Physical Education)

The purpose of the present study was to analyze how leisure behavior of housewives was affected by their personality as well as body type. This was investigated by comparing the leisure behavior patterns of extraversion and introversion groups as measured by the scores of Yatabe-Guilford Personality Inventory, and over-and under-weight groups as measured by the scores of Rohler Index.

The subjects for the study were eighty respondents who were randomly selected from the middle aged housewives in the suburb communities in Osaka.

Time-budget diary was used as the instrument to analyze their activities and experiences over two days, one weekday and Sunday.

The result showed no significant difference of amount of leisure time among the above classified groups. The most interesting finding was the fact that extraversion group engaged more into active leisure patterns such as woodcraft, bowling and attending physical fitness classes. On the contrary, introverted housewives engaged more into passive or solitary activities such as shopping, reading a book and cooking.

There were no significant differences of leisure behavior patterns between overweight and underweight groups. However, overweight housewives tended to participate more into vigorous or energetic activities.

日本レクリエーション学会会員研究目録

(昭和46・47年度)

レクリエーション学会、研究会以外で発表
された(前号掲載分以外の)ものです。

各学会
研究発表

研究者(含共同研究者)	研究テーマ	掲載資料名、発表した書名など	発表年月日
服部 祥子 (武井祥子、 福永峯子)	管理、専門職階層、主婦の余暇とスポーツに関する研究	日本体育学会 第22回大会号	46年11月21日
青木 泰三 (大阪府立大学)	野外R活動の現状と課題 (WV活動-大学クラブ活動の遭難事故調査から)	日本体育学会 第23回大会号	47年10月1日
塩谷 宗雄他 (大正大学)	職場レクリエーションの実施とその影響に関する調査研究(文部省の科学研究費による)	東海大学出版会刊	47年3月
近藤 公夫 (奈良女子大学)	前飛鳥時代の遺跡の環境整備に関する研究(2)	日本造園学会昭和48年度春季大会	48年5月
"	" (1)	"	47年5月
"	都市公園緑地モデルデザインの研究 (文部省科研総合研究)	単行報告書	48年3月
"	福井県一乗谷実跡の来訪者実態に関する研究 (文部省科学研究)	単行報告書	48年3月
"	能登地域統合計画調査	単行報告書(石川県)	48年3月
"	若狭地域統合計画調査	単行報告書(福井県)	"
"	自然環境レクリエーション容量の研究	単行報告書(近畿地区)	"
"	緑道、生活道路の利用実態の研究	単行報告書(大阪府)	"
"	尼崎市市内自然緑地修景計画	単行報告書(尼崎市)	" 2月
"	堺市街路環境緑化の研究	単行報告書(堺市)	" 4月
"	緑地環境から見た都市の適正規模	日本都市学会研究発表	" 5月
西山 勝次 (大阪産業大学)	体育社会学研究の方法論 -社会学的体育学研究の立場	日本体育学会大阪支部 体育学研究論文 11	48年3月
志水 咲子 (奈良女子大卒)	都市住民における余暇生活の実態と志向についての調査研究	家政学雑誌日本家政学会	48年
進 士 五十八 (東京農業大学)	公園設計に関する基礎的研究 -特に児童公園の施設配置について	日本造園学会春季大会研究発表要旨	47年5月
"	自然公園における収容力に関する研究	環境庁報告書	48年3月
江山 正美 (東京農業大学)			
進 士 五十八	こどものあそびば、シビルミニマム -遊びば計画の立場から、あそびばの標準スケールに関しての提案記録レポート	ミニマム研究会実践	48年3月

〈紀 要〉

研究者(含共同研究者)	研 究 テ - マ	掲載資料名、発表した書名など	発表年月日
服部 洋子 (成蹊大学)	ポーランド舞踊の民族的表現	成蹊大学一般研究報告	47年12月12日
垣内 芳子 (日本社会事業大学)	グループ・ワーク・レクリエーション・ワークの理論を基盤としての一考察	日本社会事業大学紀要 20集	47年11月25日
高橋 和敏 大北文生 鈴木秀雄 野間口英雄 川向妙子	ゲーム指導法の一考察 -SRによる実験を中心に	東海大学紀要体育学部 第2輯	48年3月15日
塩谷 宗雄他	職場におけるレクリエーション(体操・軽スポーツなど)の実施とその影響に関する研究	東海大学紀要 体育学部第1輯	45年
"	職場体育の研究方法	"	"
西山 勝次(共研)	スキーの社会的効用について その1	大阪基督教短大紀要	47年
"	" その2	大阪成蹊女子短大 紀要投稿中	48年
" (共・研)	スキーの社会学的検討	大阪産業大学紀要投稿中	48年
赤塚 勲 (大阪成蹊女子短大) 乾 道生 (大阪成蹊女子短大) 松浦 道夫 (桃山学院大) 長谷川 修一郎 (桃山学院大) 氷谷 峯男 (桃山学院大) 瀬崎 節子 (大阪キリスト教短大) 浦井 良太郎 (大阪工業大学)			
志水 暎子 藤井 彰子 (奈良女子大卒)	都市住民の余暇生活に関する研究	家政学研究 (奈良女子大学)投稿中	
三宅 義信 (京都女子大学)	ストレス要因の条件とその適応に関する研究 -寒冷、暑熱刺激に対する反応について-	京都女子大学 自然科学論集第4号	47年3月
"	ストレス要因の条件とその適応に関する研究 -寒冷等をストレスとして-	京都女子大学 自然科学論集第5号	48年3月
越智 三王他 (東海短大)	大学教育改革に関する、体育学的、未来学的研究	東海大学紀要 学生生活 研究所(第1輯)	46年7月
"	" (Ⅱ報)	" (第2輯)	47年6月30日
越智 三王他 塩谷 宗雄	職場におけるレクリエーションの(体操・軽スポーツ等)実施とその影響に関する研究	東海大学(体育学部)紀 要	46年3月
松延 陽一 (福岡大学)	クラブ活動を中心とする課外活動の研究	福岡大学体育学研究	46年3月31日
"	課外体育の研究 AAHPERの「大学のIM」の提要とその考察	福岡大学体育学研究 3-12	48年3月

〈雑誌・その他〉

研究者(含共同研究者)	研究テーマ	掲載資料名、発表した書名など	発表年月日
前野 淳一郎 (スペースコンサル タンズ 幹)	観光開発への反省と課題、実践過程における問題点	観 光	45年7月
	地域の環境開発と広域レクリエーションスペース	ランドスケープ	40年3月
	観光開発論へのアプローチ 観光開発に“発想の転換”を	観 光	47年3月
	余暇開発とマーケティング、レジャー・コンビナートへの展望	マーケティングと広告	47年8月 2年間
	公 園	百科年鑑(平凡社)	48年3月
佐瀬 一夫 (福島中央高校)	福島県内のレクリエーション行事分析	レクリエーション	47年9月
青木 泰三	生涯教育とレクリエーション	勤労青年教育 (大阪府教委)	47年3月
	余暇とレクリエーション	少年補導 (大阪少年補導協会)	47年3月
	高校登山の事故防止	体育科教育	47年10月
垣内 芳子	老人のための体操	くらしの友	46年3月
	現代っ子の身体の発達をばむもの	教育ノート	46年10月
	老人の体操	明るい暮らし	46年11月
	みんなで仲よく戸外で遊ぼう	毎日小学生新聞	48年1月
	正月の遊びと子ども	早稲田学報	47年1月
	子どもと遊び	東京の子ども	48年3月
山崎 進 (相模女子大学)	レクリエーショングッズの需用と販売	流通新聞	46年8月
	子どものよろこぶホームメイドの正月の遊び	日経ショッピング	47年1月
	ファミリーライフサイクルとレクリエーションの意義	レクリエーション	47年10月
	余暇の善用(週休二日制とレク)	家庭科学 57集	
寺岡 一郎 (大阪ユースホテル協会)	余暇活動指導者のイメージの実体調査アンケート	青少年大阪及び 府民のスポーツ	48年8月 48年7月
	青少年野外旅行活動施設の質的、量的変化と今日的課題	大阪ユースホテル協会 時報	48年3月
金崎 良三 (九州大学)	バレーボール・ブームに関する一考察 -全日本男子チームの熱狂的ファンを対象に-	バレーボール	48年1月
進士 五十八	自然要素の評価による自然地域の保護と利用 計画手法についてのケーススタディ	国立公園275号	47年10月
松延 陽一	校内スポーツの運営と審判のために	体育科教育12月号	47年12月
鈴木 勝衛 (福島大学)	レクリエーション団体の現状とその問題点	体育時報	45年9月
佐瀬 一夫			
近藤 公夫	地球環境におけるCO ₂ 輪廻の変化に関する研究	造園雑誌	48年3月
村井 孝子 (津田塾大学)	レクリエーション論	女子体育	45年12月

服部 洋子	勤労婦人の余暇とスポーツ	女子体育	47年11月
-------	--------------	------	--------

《著書》

研究者(含共同研究者)	研究テーマ	掲載資料名、発表した書名など	発表年月日
瀬口 彰 (同志社大学)	レジャーに対する要求性向	同志社保健体育	47年3月
塩谷 宗雄	1. 職場体育研究の現状と将来	現代体育学研究法	47年3月
	2. 労働形態と体格に関する研究	"	"
近藤 公夫	環境修景論	単行図書(地球社)	48年4月
松延 陽一	クラブ活動と校内スポーツ	券流社	48年6月20日

《研究機関紹介（その2）》

国民生活センター（所在地）東京都港区高輪3の13の22

国民生活センターは、昭和45年5月23日に公布された国民生活センター法に基く全額政府出資の特殊法人です。

法律の第一章第一条に見られる「……国民生活の安定及び向上に寄与するため、総合的見地から、国民生活に関する情報の提供及び調査研究を行なう……」ということ（目的）からもわかるように、情報の収集と提供のための5本の柱（普及・啓発、相談、試験・検査、情報管理、調査研究）を設けています。

普及・啓発部門では、豊かなくらしづくりをめざし、テレビ・ラジオ・出版物などを通じて、タイムリーな生活情報の提供を行っています。出版物も日々のくらしに役立つことをモットーに、テレビ・ラジオとの役割を考慮し、季刊、月刊、半月刊という構成になっています。

相談部門では、くらしの一般相談、商品・サービスの苦情相談、法律相談等多岐にわたっていますが、商品・土地・住宅・経営労働とともに、時代を反映して文化、生活環境、保健といった相談が増えていることも事実です。

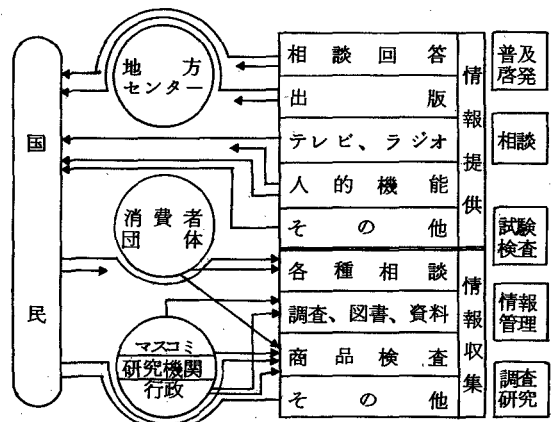
安全で信頼のできる消費財をもつことは、豊かな消費生活の基礎的条件であるとして、試験・検査部門が担う役割もとみに大きくなっています。

情報管理部門では、国民、行政機関、企業から集めた資料とともに、世論調査によって得られた資料を基礎資料としてデータ化し、国民の生活意識や動向を追い続けています。これらの情報は、国民生活統計集等を中心に毎年発行されており、めまぐるしく変化する今日の国民生活の動向を知る上で、欠かせないものです。

調査研究には、センター自身が行なうものと関係機関からの受託調査があります。48年度の主な調査、研究のテーマは次のようなものでした。

- 老令期生活の社会階層性に関する研究
- 地方都市の近隣関係
- 生活意識に関する研究（生活行動と価値意識）
- 階層移動と家庭生活歴に関する研究
- 大都市・ニュータウンの居住形態と生活環境に関する研究
- 公害問題に対する行政および住民の対応過程に関する研究
- 消費者教育の現状と課題に関する研究

このように、非常に広範な国民生活の動向を把握し、提示するセンターの役割は、社会の一部に生じた問題が、国民生活のどの方面に影響を及ぼしているのか知る上でも極めて重要であり、微妙に揺れ動く国民の心理状況と、種々の領域の影響をまともに受けるレジャー・レクリエーション界にとって、貴重な資料を提供しているといえましょう。



（機構図）

財団法人 日本余暇文化振興会

(所在地) 東京都港区芝西久保巴町2番地 第7森ビル

危機的状況にある現代の国民生活の解決に、余暇の果たす役割の大きいことを痛感し、国民サイドの生活者の視点から、余暇による人間性の回復と生きがいの感得をめざしているのがこの振興会です。

昭和48年4月1日から業務を開始し、具体的な行動の場となる「余暇サロン」を全国各地に設置し、コミュニティ・レジャーの奨励をはかりつつあります。

これは、地域社会における住民の余暇学習の啓発と余暇行動の実践をとおして、とくに教養・趣味の向上、体育・レクリエーションの充実、市民性・社会連帯意識の涵養、国際理解・国際協力の促進、団体活動・ボランティア活動の奨励などを積極的に展開しようとするもので、各種学校、社会教育団体、企業体、自治体などの有志が設置し、会の協力指導を受けて経営にあたります。

調査研究部門は、この総合開発部と並列し、余暇行政研究開発室と余暇学習研究開発室の二つからなり、余暇問題に関する総合調査・研究から、各種学校を対象とする余暇学習に関する教育システムとそのファシリティの開発のための調査・研究まで、広い領域にわたっています。

そして、この調査・研究部門の成果を直接享受できるように、サロン会員には次のような特典も設けられています。

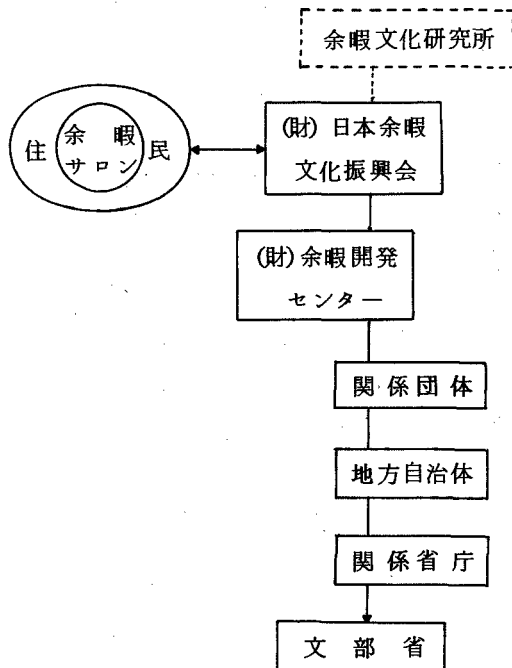
1. 余暇問題懇談会の参加
2. 余暇学習研究会、余暇指導者研修会等への優先参加
3. 各界著名人による講演会の傍聴
4. 研究員報告会の参加
5. 研究報告書の購入

6. 機関紙その他余暇情報資料等の提供

7. サロン経営の援助

それゆえ、研究内容についても、自ら国民サイドの生活者に直接寄与するようなものが取りあげられており、今後、ユニークな研究が積み重ねられてゆくことが期待されます。

振興会は、生涯教育の理念を基調としているため、他機関との関連は次のようになっています。



「レクリエーション研究」投稿規定

1. 投稿者は原則として本会会員であること。
2. 論文は他誌に未投稿のものに限る。
3. 論文は新かなづかい、制限漢字使用を原則とし、横書き400字詰原稿用紙を使用する。欧文はタイプライターによるか、または特に明瞭にかく。
4. 論文はカシラに論文・資料・その他（書評・抄録・学校紹介等）を朱書する。
5. 論文・資料の原稿にはかならず欧文の表題・ローマ字書きフルネームの氏名および図版・写真の欧文説明をつける。
6. 邦文論文には欧文摘要（Resume）をつけ、欧文論文には和文の表題・氏名および800字以内の邦文摘要をつけること。
7. 図版はかならず白紙に墨書きとし、図版・写真類は上下の別を明記のこと。
8. 論文の原稿には第1頁下端に勤務先（職名）を記すこと。
9. 論文は1篇につき400字詰にて30枚分（図版・写真共、刷り上り8頁）以内を原則とする。その他の原稿は5枚以内とする。若し長篇のもので上記規定を超えるものについては、投稿に先立ち編集委員会宛打合せのこと。なお刷り上り5頁以上の超過分は実費にて執筆者持ちとする。
10. 編集委員会は編集の都合により、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省略・訂正することができる。
11. 論文の取捨は編集委員会に一任のこと。
12. 投稿期限 第5号 原稿〆切日 昭和49年12月末日（予定）
13. 論文の送り先及び連絡先 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館内
(財)日本レクリエーション協会気付
日本レクリエーション学会 編集部

ご協力下さいました方々に心からお礼申し上げます。レクリエーションの発展のために、今後ともよりよい論文を集録してゆきたいと思えます。

◇ 編集委員

高橋 和敏 巻 正平
木下 静子 前野淳一郎
(担当幹事) 藪田 碩哉

レクリエーション研究 第4号

昭和49年5月31日 発行

編集発行人 江橋 慎四郎
発行所 日本レクリエーション学会
東京都渋谷区神南1の1の1
岸記念体育会館内
(財)日本レクリエーション協会内
電話 (03) 468-4381
印刷 富士見印刷

東京教育大学
体育学部教授

浅田隆夫

A 5判 446頁 2,700円 (〒170)

現代職場レクリエーション基礎理論

余暇生活をめぐる価値観の変化に対応する新しい職場レクの展開手法を詳述した実践的理論書

職場レクリエーションの新しい傾向
職場レクリエーションの実態
職場レクリエーションの必要性
企業が考える職場レクの必要性
勤労者の心身とレクリエーション
労働の心身に及ぼす影響と余暇生活

学歴、職種、年齢と余暇活動
人間関係とレクリエーション
職場レクリーダーの役割
職場レクリエーションの効果
職場レクリエーションの経営
職場レクのプログラミング

東京都港区赤坂3-21-15
東都赤坂ビル

労務研究所

郵便番号107 振替 東京117024
電話03(583)5830・5790

わかりやすい体育実技

の2色刷図解書

日本大学教授

浜田靖一著

母と子の楽しい体づくり

幼児のたいそう

B5変型 二二〇頁 八〇〇円

親子体操は日常生活の家庭的な活動を基盤に置いた、しぐさや遊び、いわば親子の自然な愛情の純真な発露ともいべき動作を出発点としたものである。

水中遊びと水中体操

B5変型 一一七頁 八〇〇円

水泳は楽しくなければならぬと思う。特に子供の水泳から楽しさをうばってはならないし、今こそ楽しい牧歌的な水音を子供にかえしてやらなければならない時である。

体づくりと仲間づくりの新しい体操
改訂組体操

体づくりと仲間づくりの新しい体操
続組体操

組立て運動

輪の体操

改訂棒の体操

旗の体操

ボールの体操

ボールの体操

メイシンボール

学校鉄棒運動

体操Ⅰ理論編

体操Ⅱ実技編

かなづちからとびうおまで
古橋水泳教室

リズム運動入門Ⅰ

日本水泳競技委員長 古橋広之進著

黒田公子・田村典子共著

クラブ活動と校内スポーツ

生涯体育

福岡大学教授 松延陽一著

鹿児島大学教授 浜口陽吉著

東京都文京区小日向二一十八一四 電話〇三(九四七)〇七三〇 振替東京一六三七六五 泰流社

JOURNAL
OF
Leisure and Recreation Studies

No. 4

- ☆ Case Study on the Physical Recreation in a Urbanizing
Local Community
- ☆ A Study on Recreational Activity of High School
- ☆ A Study on the Educational Effect in the Recreation Leader
Training Course
- ☆ Personality and Body Type Differences in the Leisure
Behavior of Housewives
- ☆ Bibliography

Japan Society of
Leisure and Recreation Studies

MAY 1974